芭蕉袖草紙　上

へ 5
5618
1

凡例

一此冊子は芭蕉一代の紀行なりしや杉
風の竟書也とて東武の人の秘蔵の板
書肆かくし出し写し梓に来る
ありけりて古の紀行に拾合を添す
初めに次第ありして讃は花屋吉
易等の人ありし諸て其は選句を案
はあまり古跡かかへ出れはこれ猶て
板行の書誌にありて句意の解しもさ
記されも十の七八は数ば我しつ又
再案のこれは見よからぬえてそらに
返本の翁ちかうきそへさり志のあれて
此冊子にて云へり芭蕉の大いなる方を見
るへき事のままにあるへき

一芭蕉の句に次韻虚栗なとあまた撰
行の題目ありてしれて連句の間に其
人の発句あり化者の名の下に又ハ芭蕉
のるとこそあるへし

一服部土芳にて所り其文学の海に志り入て
いふへし

門 へ 號 5618 巻 1

一松島獨吟之圖ありこれも芋彩好みて
無下にあらねば後人考ふべし
一いまこの寫の出たる後は猿蓑にあるか
も化者もさらひそりこたる撰集の材
出たるあらたに又ならべ又た後猿ハ
ゆゑ後後の板りたれハ校の正しからぬ
まれなりけるべし
一附録ニ四季の發句撰れ録りして題を
これ等林あつめてすのを校合しぬ
あられハ選すなりひとへに鈔へ化例を
かうむる者なりけり

文化八年未初秋　花屋菴奇淵

芭蕉袖草紙上　浪速　花屋菴奇淵校

延寶九年

次韻

晋伯倫傳ニ酒徳頌ヲ樂天継ニ以テ酒功
讃ヲ青醉之續ニ信徳七百五十韻ヲ

二百五十句

挟拔とあつて仕たい花なきと
まさかさびての事もあるべく

鷺の足雉脛長く継添へて　桃青
這句以テ荘子ヲ可シ見矣　其角
禪骨の力たわゝふぬるささふ　才麿
きそくく風の松ほれりしぬ　楊水
蓑よまて軒をかゝる紅玄　角
灯らうりと徐しけん月　青

黴雨ハ麻かゝる山のあたより　水
粟に稗さく黍ふの守　丸
佗雀昼眉が客によびつらん　青
慈悲ハ舟に開つれくうそ　角
風のも食に影の下が分すゝ　丸
先祖が見知る霜の夜語　水
灯火がらしく幽霊を世に返し　角
古さめかしべに鬘引うけ　青
武士の母ゑが墓にいは　水
女いなくなるをきいても　丸
稼あしく鏡の影つれる眼　青
仏の猫の月が肖ける　角
露に染て且易別易忘　丸
乳なしの嬰のこかる菖葉　水

春秋が花と滄に帆ふ比　角
白奥をとらすより餞春が宴　青
寛平のおかん俳諧合あり　水
濤士枕灯が挑して睡る　丸
はしきありける女房が声冬て　青
血摺の衣やきて秋や志のふらん　角
ふりに未しむくろんとてなくと　丸
獄囚正がおもかしむ　水
天帝に目安が出て宮えあけ　角
拉が拉て星擲を拉　青
雨の擔子風のこすれ冷かれ　水
秋に對して不一常一堂の記　丸
白款仁義村に道ゝ尊ヲ　青
湊の火鼓銅が射る　角

師(ブリ)奥ハ諫め鰻ハ将が剥る　丸
安房の御崎に流人身を泣　水
向後(コウ)とて行徒ちの晩鐘を　角
指折に初音の魂魄の竟　青
恋人の袂に似るうり着物　水
雨がくれるか夜風ゝ書あ　丸
夕暮は息に胴がちく思ひ　青
民屋(ミンヲク)あつて役がせはむる　角
桑の木熟る草の社は昧(シラ)く　丸
又露かゝる盗賊の古庭　水
力こんぐん言尾夕手向られて　角
哀れと又が踏る揆(ヨスカラ)終　青
従来し小袖よ何と抱寝　水
朔夕枕よとどめおとろく　丸

花に照る大祓宮(オハライハコ)の寄神と　青
幣に巣つくる訛(コトツケ)の鳥　角

次韻

雁に字とらへ
みよまだるくとこそ

春流よく摘み香とてあり　其角
今年は秋京が森見えて　戈丸
月が連に坐(ザロ)烏帽子をかふるに　揚水
篠に法利が打ちさびしや　桃青
おぼこされ川流草の葉が散しくれ　丸
早山路(ヤシサンロ)に鉄をかせける　角
夕あかる華とかきれなかくるまで　青
夜盗松風の音が合はに　水
雨の闇にうけて敵をさらせたる　角

舞臺よ紫の房投打戸　丸
とひやう仁うハ氣よう世話鳶て　水
大さつくこと去年の名ふしく　青
投さめ俺て雲の炉に根深温　丸
あくしれいつく帳の紙室　角
女の顔うつるところて袖すこく　青
若気年みしてやつれ潤ろく　水
ストント茶入落しては命さて　角
とりあへ手狂ふの仕ろ月　丸
秋の末つくる焙烙残通り
なりて
篤の院の御佳哉とよ　水
免飼よ舎人ハ花よかゝるめり　青
子世の番哉寅よ飢て　丸
渾沌翠よ棄て氣小狩よ　角

朝嗅きるむる庵くの山　水
恋のけられ女房よ髪のけるあやり　角
吉原君なぬところいさなりよ　丸
捧軍勇やつふせさ止つて　水
たきうすの陰より梓よ弦引　青
富の屋哉徳明王のちうまん　丸
摩訶右衛門　若衆國よ生ル　角
愛ヲ捨子ヲ捨毗盧遮阿毗羅吽　青
嵐と落て風さやさふく　水
夜の食乏しく森覚ゐるはい　角
蚓の音さへ耳よ猿らい　丸
月の秋うらうらの且夕て　水
霧うしろも蛛ク落ツ髪　青
ものいふて鏡よ顔の締りえよ　丸

三
袷と酒ありの具足て淀　角
小袖なれ木枕に常さうも宅　青
納戸の神が齋(モノイミ)し　祭し　水
婚禅之礼ニ用ニ於鯨之脯(ホシヽヲ)　角
やとひの翁歯朶刈に入　丸
風いとく牛さへ氷をふみるに　水
荒屋になるの指尿をとく　青
おそろしく白骨のうへ付てみる　丸
曽呂利新佐が讃に投出し　角
禅小僧夏窓に月の詩を刻(キサム)　青
雷鉢(スリハチ)鳴て芭蕉そよぐ風　水
花の今朝駅(エキ)に羊が画切く　角
擣よわしうちがかるると法喜　丸
不埒なひ息(ムスコ)ハ去年の雪が掃　水

三ウ
笠が着て寒く庵をるらん　青
風のからしの枝に菜干(セル)　丸
山ぶ嫁をだいて失けり　角
志のびふす人は恥花をて明渡し　青
木槿のちらしるを本所の暦　水
細腰に鬼灯の蝶飛てちらし　角
踊持夜の旅小なり波　丸
酒の月御伽坊主のうち崇て　水
青葉流しやる奥の泉水　青
仁背の葉にわれ公が世やつ手　丸
月並にまたえて蛇兜と化　角
築地ある根の庭に車は止め　青
天窓く闇(ヤミ)の金掻のさる　水
堀江の破(イリ)ラ筏は白浪に　角

青海苔ちらし擲琴を弾 丸
花の名に定よ旅泊は賞る 水
木に秋より東金の俤 青
淋しさは寓意に露干を豆俵 丸
夕顔に宿で貧居ひし名 角
枕の本小鉢なく皿に添て 青
枕の清水に嘗咳くむ 水
夏の牙は行と饒なさるて 角
我咎信わには宿々もれ 丸
生海ら浪折られてハ金堂 水
沈対消て雨の火青し 青
艸の奥下妻ら京に登かり 丸
秋の里に足あらひ鍋 角
配所人芦の小兵部は干かて 青

あらゐの茵辛螺と花と 水
心地やむ鋼よ針さん生小舟 角
ゆれよ尾象花を出し山花 丸
麦望れ豊の光は芝しかり 水
勅使芋原の朝臣蕪坊 青
秋は峰鳥の鳥は庭へとし 丸
夏やさの女の時鳥され 角
津の浪れ生田の森の初月夜 湊人
道さまたけよ元会檮す 水
霜下りてよれ里の粥配り 角
寺々の納豆の声ハ行さ涛 丸
よれう卵き擔花ちりの光こ浅 水
囲炭ゐよて小雁よ漁りし 青
腸さそ洗よ猪の清水新らくへ 角

蔵ゟかられに半丞したる　丸
外の戸城人待下女か床忘れて　水
寺に泊みてに暇こゝへに　青
洞のこゑをほんりくと鳴されハ　丸
千しを拭くうつゐの埋木　角
茶の湯ひて寸読花にゆるかなと　青
如泉法師か去力あり　水

次韻

世に居て家こそハ秋の姥中哉　古丸
添おく月小かゞみ荻蔵　揺水
あられも茄子ハ菜まうら枯て　桃青
鯨さひをたり海風漸く　其角
雲れ客実の客とうちまくハ　水
檴鉄の亭に鉄を役ら　丸

楽やりと隠て風流話とよ　角
精は羽織を着せておかくし　青
嬉しさや女房のさいて泣付哉　丸
惑あつれたる身子語に　水
意見て桟の板戸をこゝに鋳寺　青
抜ゆく宿にゑゑうも大　角
髪結の住ゝん庭へ遣して　水
辛抱婆の男もくうこ酒る　丸
骨力土蔵得のころ記より　角
痩たる馬の艶に鞍す　青
内に帰てもんいきのに辟旅　丸
米とく耄の耳ふ露けき　水
依もかひて着子おたく秋忠もて　青
西浅居士とて翔浮きな　角

筆耕寸青織の牛に花付て　水
燕菜乃の流くむら雀　丸
二
后宮の蔽入車やりふる　角
孫たしや上の御若衆の袖　青
紅巾かつぎさけて夜の雲猫風呂　丸
挑灯切て霜のかけろひ　水
風呂の角内と牙城降りならぬ　青
入ルの山ふゑ猿まのり　角
雷の斧下々しもなえに　水
玄又玄し龍頭の函　丸
俗よいの康峰の海の底ならん　角
胡の日は東本地赤螺　青
何城見て蛤の殻て数多る　丸
ひそかしと雨義然ある　水

有器草夕芋の葉の何朝露　青
栗刈敷て團子干を坂　角
鶯鶉の好らいの穀ひろく　水
水汲起て箒寝る　丸
釜うふる人は衣のひておるる　角
樋とるまだくゆほろし燧　青
古家の泣寺閑をさくるれ　丸
いわちの禿乳鶴風の荒ふる　水
麻の葉よ生る小餅を折突て　青
ちとく枝さりふる生の浦抽子　角
乾たれくて清紀傳城住力ふ　水
啼て森でござんけ渡と乗　丸
苴蔓の会たく往ふゐそる　角
人配を待て生駒ちらし　青

三

石日花のめでたく咲にけり　丸
木むにかなで風哉舞柳　水
霧雨屋の欲は霞に空きり　青
驢馬の進まぬ斜キラく　角
大根の葉ぶ哉の実れて春さうう　水
雪のうら鮭に文付てやる　丸
裏や火桶の搥の櫻字紀　角
有侘し床小娘とん引とる　青
もやくと庭へ入ぬくらくにて　丸
通いは首の泣てたくとむ　水
迷ひしも根の系の目のけ塚　青
挨拶の助後れしられて　角
今宵月に村風とや三味線と　水
やさしやさく記淡こりんの　丸

秋の氣服切竹哉こそれい　角
住持ありて明る葉の戸　青
面白く盆曲哉社ひしに　丸
海老ちらしたる海苔の青衣　水
急流の松の痕のされ世　青
業世に踊る雪け明神　角
ト問し鷺の翁の恋くと　水
蛇の氣立て草の紙ひ　丸
笹流れ皇居よりけ紙張弱　角
清水の司麦を撰　青
いつも来る法味ちの踊るえてに　丸
老尼ちらしの叙あらまう　水
衰録る捨子拾ひに遣して　青
小里に康の裾引て入　角

松茸に遊し陽之は枯いちご　水
葉の精に有情のいが　丸
侘竈に蛬(コウロキ)の音が月ふる　角
足袋さもと宿に風呂を待　青
扇折る女は夏に捨られて　丸
まいに江戸に急わとゝき咲　水
むさしを歩き後に續てやまり　青
髭ある菜のこ不もとめて　角
秋くに来て上る陸る声細り　水
法眼ヵ出し武者絵ならん　丸
宮造る室(ウツ)の道(タクミ)の名蒙して　角
屡斗が冠の纓にわりけ　青
翁な鴻栗が庵のうるめかれ汝り　丸
故園今と云は蘭腥し　水

風の月熱の涕雲が結ふる　青
黄なる小袖の腰しさに露　角
山(ウ)路まくいろちの笠を忘れ　水
篠の枝折が猿にゆる　丸
岩屋の插を涼く見の不紀　青
気をうたゝれし人の拔から　角
血が滴て風き刀が折る叢(ヒトヽ)　水
古沓がと流て壁辺に枕に　丸
打られて花に散る蝶むしろ　角
抓は酔て酴醾に入る　青

天和三年

虗栗

酒債尋常住ㇾ處ニ有
人生七十古来稀

詩あきんど年を貪る酒債哉　其角

冬湖日暮て駕馬鯉　芭蕉

干鈍き夷に関をゆるすらん　角

三線人の鬼を泣しむ　蕉

月は袖かうろに睡る膝枕　角

鴫の羽しばる夜深し　蕉

ウ

恥しらぬ僧を笑ふか艸を祀　蕉

時雨山崎傘を舞　角

笹竹のどてらを藍に染なして　蕉

狩場の雲に若殿を恋　角

一の姫里の庄司に恋れ　蕉

斬名にたつと云鼓を責なり　角

鵺かも怨の霊と啼つゝ　蕉

うき世に沈む夏食の瘧　角

皆ハ花貧重し笠ハさん俵　蕉

芭蕉あるじれ蝶丁(タウ)見よ　角

腐れたる俳諧犬もくらはずや　蕉

鐸(ホチ)こゝして寐ぬ秋ぬ月　角

聟入の近法くゆかしにそれ初　角

たうといやんて葛うらみ尚し　蕉

潮りそ筆達ハ詩二小紫　角

黒鯛くろしおとく女が乳　蕉

枯蓮蛸蝶の角を考ある人　角

魘神を使ふれ荒海の崎　蕉

鐵の弓立猛き世に出る　角

帋懐に雉をかくつれ　蕉

山寒く四睡の床を吹はらし　角

うち消て火消て指の灯　蕉

下司后朝をねたみ月を室　庚
西瓜を綾に包むあやふく　、
哀れいかに宮城野ぼた吹荒らん　蕉
みちのくの夷しらぬ石臼　角
武士の鎧の丸寝まくらかす　蕉
八声の駒の雪を告げつゝ　角
詩あきんど花を貪る酒債哉　、
春湖日くれて駕與吟　蕉

天和三年

虚栗

憂テ方ニ知ル酒聖ヲ
貧シテ始テ覚ル銭神ヲ

花にうき世我酒白く食黒し　芭蕉
眠を尽く陽炎(カゲボシ)の痩　一晶
鶴啼て青鷺夏を隔つらん　嵐雪
注

童子瓈を手折ル唐梅　其角
力を偶を汀の蓼を芦刈て　嵐蘭
浪のさくまもまたぶこと弱らけ　筆
琵琶洗ふ雨よし朝の明はし　晶
胡に烏帽子をふるふ紙衣　蕉
浪人の意をうる杖あつかはれん　雪
やぶれ一枚に入りひたる紀　蘭
萩さくら同じ宗旨を挿ひける　角
蘇は退之が肝魂(キモタマ)を奪　晶
雷鳥のその声は角を吼るらん　蕉
汐ごろ海なり鯱孕(ミコモ)る　雪
傾城の繻を捨し鉢代ら　晶
羽織に角を隠を風流雄　角
仇し狩く据を出て州の力　蘭

破蕉張て詩の上ヲツク　雪
朝鮮に西風を語る逸あり　蕉
はくしらぬ火の松浦行捲　晶
ぬつらえるあけぼのしの葭庇　雪
蛩ハ松の蚤哉のむ　蘭
擣入ぬ穀ハ六十(ムツキ)の荊まて　角
御所に胡座く世哉夷(ワイイ)之　蕉
人の怪異穗長の穿の肘る恐く　晶
松田首なき雪の曉　雪
さるかしや陣中に似せ鼾かく　蘭
山(サンヤ)賊に飢て餅哉貪る　角
盗ミ弃れ夜に伯夷が足洗ふ　蕉
とくさい武士の憤(イキドヲリ)艸　角
見(ウ)かし紀艶も哉やくや楽枹　蘭

笑ひさんやふ降る亀　晶
曉の麻云哉母にさ為されて　雪
はひに髪ゐあかしぬるかり　蕉
それに插廬山の列をこねたん　角
柳にをらひて瀑布哉酒呑　蘭

草の戸に我ハ蓼くふほたる哉　其角
蕣に我いめしくふおとこ哉
深川菴
芭蕉野分して盥に雨を聞夜哉
手づから雨のわび笠をはりて
世にふるもさらに宗祇のやどり哉
天和四年　貞享改元
幾霜に心ばせをの松かざり

何葉院も花に来かゝりたる紬

三聖人の図に

月花のこれやまことの主達

ありとき寸西月ハ梅花かさゝ

破屋なるこちへ吹きて風の声

そゞろ寒さや

野さらしを心に風のしむ身哉

秋十とせ却つて江戸をさす故郷

雨ふつて山を見れ雲にかくれり

霧しくれ冨士をみぬ日そ面白き

馬上

道のべの木槿ハ馬に喰れけり

富士川にて三つ計の捨子の

泣あり哀むの投てやりて

猿を聞人捨子に秋の風いかに

杜牧が早行の残夢小夜の

中山にいたりて忽驚く

馬に寝て残夢月遠し茶の烟

外宮御燈不見えて

又うへもなき峰の松風

志むをり覚て

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

西行谷

芋あらふ女西行ならバ歌よまん

ちりの世を小志をくやる

綿弓や琵琶になぐさむ竹の奥

當麻寺庭上の松をみるにあれは

千歳もへるらん大伽藍

もし仏縁にひかれて斧の罪
をまぬかれたる事幸にして尊し

僧朝顔いく死かへる法の松

芳野ある坊に一夜をかりて

碪うつて我にきかせよや坊か妻

西上人の草の庵の跡ハ奥の
院より二町はかり分入ほとゝくとく
の清水ハ今もとくとくと雫落る

露とくとく心みに浮世すゝかはや

後醍醐帝御陵

御廟年を経て忍ハ何をしのふ草

不破

秋風や藪も畠も不破の関

冬の日

笠ハ長途の雨にほころひ紙衣ハ
とまりとまりの嵐にもめたり侘尽
したるわひ人我さへあはれに覚ける昔
狂哥の才士此国にたとりし事を
ふとおもひ出て

狂句凩の身ハ竹斎に似たる哉　芭蕉
たそやとはしる笠の山茶花　野水
有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮
かしらの露をふるふあかむま　重五
朝鮮のほそりすゝきの匂ひなき　杜国
日のちりちりに野に米を刈　正平
我庵ハ鷺に宿かすあたりにて　水
髪はやすまをしのふ身のほと　蕉

いはらりのつらしと氣衣青り権　五
きえぬ卒塔婆ハなミて泣　兮
紙法のかうつき窓く火を焼て　蕉
かるしれ鼻へまたとし虚家　四
田中なるこゝろんゟ柳落るころ　兮
青まふね客人いちんもぬ　水
たるされ筏横よ流るゝ竹細し　四
櫓さうしよ断ま下りある　五
二の尼よ近侍の花のちらりすく　水
蝶ハむらゝふとらり梟かむ　蕉
家りおよ蟲をとく歌おほろなり　五
いまそ限の矢とちなつよ為　兮
ぬを人の記念の松吹おれて　蕉
志もし宗祇の名を付し水　四

笠ぬきて無理にも濡るゝ北時雨　兮
冬がれ分てひとり唐苣　水
しらしらと砕けしは人の骨か何　四
烏賊は夷の国のうらかた　五
あられさの遍まそげし歌仙　水
秋を一斗よりつくと哉そ　蕉
巳来の李白が坊よ方とえて　五
巾よ木槿をさむ琵琶喜　兮
牛の跡とふらぬ昼の夕ぐれに　蕉
箕よ鮗の臭ひいらく文　四
まろいのりの才の筆孕むべく　兮
守よハ妹の眉かきにけん　水
綾ひとく居り湯に志壑の花漂て　四
廓下は蘚のうけつゝるん　五

冬の日

おもへとも壮年いまたころもを振ハす

初雪のことしも袴きて帰る　野水

霜にまた見る蕣の食　杜国

野菊まてたつぬる蝶の羽をれて　芭蕉

うつらふけれと車引けり　荷兮

麿か月袖に鞨鼓をならすらん　重五

桃花をたをる貞徳の富　正平

雨こゆる浅香の田螺ほりうゑて　国

奥のきさらきを只なきになく　水

床ふけて語れハいとこなる男　兮

縁さまたけの恨のこりし　蕉

口おしと瘤をちきる力なき　水

明日ハかたきに首送りせん　五

小三太に盃とらせ一ッうたひ　蕉

月ハ遅かれ牡丹ぬす人　国

縄あみのかゝりハやふれ壁落て　五

こほしくとのゝ地蔵切る町　兮

初花の世とや嫁のいかめしく　国

禿いくらの春そかハゆき　水

櫛箱に餅すゆる閨ほのかなる　兮

うらひを紀に紙燭とほして　蕉

篠ふかく梢ハ柿の蔕さひし　水

三味線からん不破のせき人　五

道すから美濃て打ける碁を忘る　蕉

ねさめ〳〵のさても七十　国

奉加めせ御堂に黄金すゝめし　五

ひとつの傘の下挙りさす　兮

蓮池に鷺の子あそぶ夕ま暮　国
宮に手づから薦やなれぬる　水
月にたてる唐輪の髪の赤枯れて　兮
恋せぬきぬた臨済をまつ　蕉
秋蝉の虚に声きくしづかさハ　水
藤の実つたふ雫ほつちり　五
袂より硯をひらき山かげに　蕉
ひとりハ典侍の局か内侍か　国
三ケの花鸚鵡尾ぶりの哥いくさ　五
しらかみいさむ越の独活苅　兮

冬の日

杖をひく事僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな　杜国
こほりふみ行水のいなづま　重五
歯朶の葉を初狩人の矢に負て　野水
北の御門をおしあけの春　芭蕉
馬糞掻あふぎに風の打かすみ　荷兮
茶の湯者おしむ野べの蒲公英　正平
らうたげに物よむ娘かしづきて　五
燈籠ふたつになさけくらぶる　国
露萩のすまふ力を撰ばれず　蕉
蕎麦さへ青し滋賀楽の坊　水
朝月夜双六うちの旅ねして　国
紅花買みちに時鳥きく　兮
しのぶまのわざとて雛を作りゐる　水
命婦の君より米なんどこす　五
まがきまで津浪の水にくづれ行　兮

佛喰ふたる魚解きけり　蕉
縣(アガタ)ふる花見次郎と仰られて　五
五形菫の畠六反　国
うれしげに囀る雲雀ちり〱と　蕉
眞昼の馬の眠たがほなり　水
おかざきや矢矧の橋のながきかな　国
庄屋の松をよみて送りぬ　兮
捨し子は柴刈長ケにのびつらむ　水
晦日(ミソカ)をさむく刀賣年　五
雪の狂呉の國の笠めづらしき　兮
襟に高尾が片袖をとく　蕉
あだ人と樽を棺に吞ほさん　五
芥子のひとへに名をこぼす禅　国
三ヶ月のひがしは暗く鐘の聲　蕉
大

秋湖かすかに琴かへす者　水
烹る事をゆるして鯊(ハゼ)を放ちける　国
声よき念佛藪をへだつる　兮
かげうすき行燈けしに起侘て　水
おもひかねつも夜の帯引　五
こがれ飛たましひ花のかげに入　兮
その望の日を我もおなじく　蕉

冬の日

なるみつふかし大焼宮を
うけられしと

炭賣のおのがつまこそ黒からめ　重五
ひとの粧ひを鏡磨寒　荷兮
花蘇馬骨の霜に咲かへり　杜国
鶴見る窓の月かすかなり　野水

風吹ぬ秋の日瓶よ酒なき日 芭蕉

荻織るかさを市に振する 羽笠

か茂川や胡麻よ代まつりや近し 兮

いそらの舞なりけりの沈 五

ねりへを布搗うと寐られて 水

うさハ卅(チ)袋誠る三(元)平(カネ) 囲

捨られてくねるる鷺なれある 笠

火おかぬ火燵なき人をえん 蕉

門ちの菊よ張るかりて寐る 五

血刀かくを方のかるきに 兮

秀おりて寺卿の読七つきく 囲

冬中りけ納豆たくくあくし 水

それよ泣桜の黴とをそにける 蕉

侘ぞのいそは歎冬を呑(ノム) 笠

先

白燕濁らぬ水よ羽をあらひ 兮

宣旨かしこく釵(カミサシ)を待る 五

八十年を三つ見る童母もちて 水

なかゝたちそむる七夕のつゐ 囲

西南よ桂のちれのつれむそれ 笠

蘭のあふるふ卜木ある音 蕉

僧の家よ質なる女見てけり 五

駒瓶よ栗を洗ふ日の蓍 兮

あやりきそぬてしこかさる心なれ 囲

流くうるも白る無業の文 水

寅の日旦を鍛冶の疾起て 蕉

雲からかしよ南京の地(ツチ) 笠

どう死して雉とも云ぬ人の像 兮

法よころの浄き苛の根 五

粥すするあかつき花にかしこまり　水

狩衣の下に鎧ふ春風　蕉

北のかたなくなく簾おしやりて　笠

寝られぬ夢を責むる村雨　国

冬の日

田家眺望

霜月や鸛の彳々ならびゐて　荷兮

冬の朝日のあはれなりけり　芭蕉

樫檜山家の体を木の葉降る　重五

ひきずる牛の塩こぼれつつ　杜国

音もなき具足に月のうすうすと　羽笠

酌とる童蘭切りにいで　野水

秋のころ旅の御連歌いとかりに　蕉

漸く晴て富士みゆる寺　兮

寂として椿の花の落る音　国

茶に糸遊をそむる風の香　五

雉子追に烏帽子の女五三十　水

庭に木曾作るこひの薄衣　笠

なつふかき山橘に桜見ん　兮

麻かりといふ歌の集あむ　蕉

江を近く独楽庵と世を捨て　五

我月出よ身はおぼろなる　国

たび衣笛に落花を打払ひ　笠

篭輿ゆるす木瓜の山あひ　水

骨を見て坐に泪ぐみうちかへり　蕉

乞食の蓑をもらふしののめ　兮

泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て　国

御幸に進む水のみくすり　五

詠よる年の小角豆のむしろ　水
萱屋まばらに岩囲流く臼　笠
けしあまの小坊交りに打むれて　兮
おるる蓮のみたる蓮の実　蕉
しづかさに飯台のぞく月の前　五
露をくきつね風やかなしき　國
釣柿に屋根ふかれたる片庇　笠
豆腐つくりて母の喪に入　水
元政の草の袂も破れぬべし　蕉
伏見木幡の鐘はなをうつ　兮
いろふかき男猫ひとつを捨かねて　國
春のしらすの雪掃はきえけり　五
水干を秀句の聖わかやかに　水
山茶花匂ふ笠のこがらし　笠

冬の日

いかに見よと難面(ツレナク)牛をうつ霰　羽笠
樒火にあふうかれたるの松　荷兮
とくは外下髪に鞍をちやせんして　重五
檜笠に宮ばやつとあさ露　杜國
狼に拾かいん有いうら　芭蕉
ひくりに橋をとられ岐阜山　野水

熱田三歌仙

あつたにほうりなんくばこの
海みんとふなきしたるれ

海くれて鴨の声ほのかに白し　芭蕉
串に鯨をあふる觴　桐葉
二百年我此山に斧とりて　東藤
樫の椎やく秋は来にけり　工山
入る月に鶍(イスカ)の鳴れる空　葉
駕ふき国の貢まへり　蕉

ウ
時雨れ来る母の涙のうと　山
一つもん咲し芍薬の窓　藤
碁の工夫二日とらぬ月と明て　蕉
周よ帰ると孤ねぶれり　葉
霊芝ほる沢原なる蕃かき　藤
美義元ら杖の入り口　山
芝染て衣の破れ綴りみる　葉
秋の鳥の人渡より　蕉
杜しくひの雅かれ涙ハ寄流て　山
雲の奈よ就残出続く　藤
花墨る石の扉を押ひらき　葉
美人の形をゆひうけろふ　山
蝦夷の聟殿記録と身を俺て　蕉
生海鼠丁を小も袖ハ濡なり　藤
芸

木の芽より西不行堂の発句　山
薮よ菖屋の十はうつえ由　蕉
ほつしと蛇様ほくる祖父一人（とうり）　藤
京よ名高し痛の呪咀　葉
不二の根を芝墓てゝ潤業あら　蕉
藤より雀のひとつ親らん　山
かくれよ鏡残志のひうれ粧ひ　葉
夜かなく小性萩の戸を押ス　藤
身細く附斗の箸八つ手なりて　山
握（サツチ）いそく消かくの緒　蕉
破れたる具足残図不差のなる　藤
高麗の縣よ畑作りて　葉
石塚の庭紙よなかれ書を残り　蕉
ちひさき家の永き月加　山

春雨の彩蕎麦粉ひまて　業
青艸ちら比藤の撮ツホ折　藤

熱田三歌仙

十二月九日一井亭

旅寝よし宿は師走の夕月夜　芭蕉
庭さへせはく降れる薄雪　一井
とやしと見於おつる窯焼て　越人
紙漉村に町幸有ころ　昌碧
琴持て遊の上ば待かへり　荷兮
障子の明れはき白る　竹　楚竹
乾もせて寄る名ふはひ怖れ　東睡
こそれし髪の汗ぬくひゐる　蕉
おけられてみうらたゝぬれしさよ　井
乳を飲める子の我ま似かし　人
麻布を染ひる待にて織かねて　碧

嵐と取ためハ行てこそ世へしれ　兮
夕立の先よ守ゆる雷の音　竹
馬もありて町山際の雲　睡
小雄鹿のそれ炙袖に射付き　蕉
花ある程いられたる月　人
風よかちけて花の二ツ三ツ　兮
畠よはやく雛ハ遥なり　碧

病床

薬のむさらでも霜の枕かな　芭蕉

中あしき人のくれとらう
つくろひて

雪と雲とふくひ添えれ名有か
年くれぬ笠きて草鞋はきなから

貞享二年

山家

誰聟そ歯朶に餅おふうしの年

伊賀にて

旅鳥古巣ハ梅になりにけり

奈良へ出る道中

春なれや名もなき山の朝霞

二月堂参籠

水とりや氷の僧の沓の音

京に出て鳴滝の秋風か

別墅にて

梅白し昨日ふや鶴を盗まれし

杉菜に身する牛二ツ三ツ　秋風

伏見西岸寺任口上人を訪て

わか衣に伏見の桃の雫せよ

大津へ出る道にて

やまぢ来て何やらゆかし菫草

湖水眺望

辛崎の松ハ花より朧にて

蛭か小島の桑門我名を

聞て草の枕の友つれにと

しのひ来るに

いさともに穂麦くらはん草枕

大顛和尚の遷化を旅にて

聞て其角へつかはしける時

梅恋て卯の花拝む涙かな

千鳥掛

知足亭

かさ[illegible]たる我に衣の思ひあり　[illegible]

麦穂なみよるうるほひの末　知足

二ツして笠きる鳥ゆふられて　桐葉

くさに袖ぬれし名取記　叩端

侘ぶれて力待ほどの[illegible]侘ひ　業言

それとはかりの秋の風音　自笑

[illegible]て書ふ[illegible]耳[illegible]紀　如風

会力[illegible]こゝふ[illegible]　安信

道[illegible]の窓に一唱示し置　重辰

長者の輿に背[illegible]けぬ　蕉

かゝ[illegible]のうつ[illegible]　足

岸にかゝふる八百の鷺　葉

森遠く[illegible]三ツ四ツかゝる[illegible]　[illegible]

子[illegible]秋の月さのしぼり　辰

それの秋を[illegible]の梅[illegible]　足

猫[illegible]は猫霧晴れて[illegible]　風

鳥辺野不葛とる女[illegible]て　葉

[illegible]める[illegible]精[illegible]　言

[illegible]に経冊付て[illegible]　[illegible]

[illegible]をつれを[illegible]波　蕉

天子さへ勅に[illegible]て[illegible]　信

五月の風の[illegible]や雨[illegible]　風

菓子[illegible]も木[illegible]れて[illegible]　笑

長[illegible]の[illegible]名[illegible]ひ　足

熱田三歌仙

桐葉亭

何となしに何やらゆかし菫艸　[illegible]
あさ露て蛙ほなる　叩端
田螺とる隣の童のけさかけに　桐葉
公家に着する尻斗の中道　蕉
有黒る雲の東雨の不落とて　端
酒のむ僕のいつに供しき　葉
双六のうらみ紙文に出して　蕉
琴の爪としむ被はつり香　端
鬢下を侍従のむこめ裹へて　葉
野の宮れおもし岐王るの姫　蕉
うら枯になる艸紙つけ添　端
義清とこむる名月の雲　葉
面白の狂女の秋の衣とるや　蕉
秋風さしめに紅粉皿　端

川瀬ゆく鬢を角に結分て　葉
舎利となる滝に蛇目うつろふ　蕉
かしこやる石の御庭の花ぞ乙し　端
羽織に酒杯うつる桜屋　葉
声よこて女に琵琶れかかり　蕉
清らかに屏風の画に洞ふさ　端
男かましし笛のいろへ此世ぞ咲り　葉
三股のふね深川の衣　蕉
庵住やひとり杜律を味ひて　端
花幽なる竹こきの蕎麦　葉
いふ鳴く百舌の次に矢を負ふ　蕉
高汲む小倍袖にやかかに　端
月明て折枝は山を照たつらん　葉
こぼれ衣盃の語ら何む乙　蕉

むら雨のかくれ捨たる馬の背　端
ひらい兎の凩冷かく音　葉
笠見かる人は簾にとちれて　蕉
男やもめの売をられしよ　葉
風かゝし紀大年の秋の七ッすく　端
衝門をたゝく生鍾の巻　蕉
常樂山左樂ゝ助が宗咲て　葉
霞まのこる連歌所の松　端

熱田三歌仙

流くしと榎のもれの袖にちる　桐葉
ひらり茶が摘む藪の一家　芭蕉
日うけ山雛子の雛をれいて来て　叩端
清水をとらふ馬柄杓の方　閑水
面かさ雌四又熟賣る艸の上　東藤
芒

宿のミやけふ拯子が掘る　蕉
箕紙を都の連歌に付て　蕉
暮る大津に三井の鐘す　端
雪が侘ふ漁の娩が袖とえよ　山
康より魚の四五百の空　葉
松風の饗(ウタゲ)を洒が香はくし　水
佛を刻む西谷の僧　藤
烏羽玉の髪こさう女夏に来て　端
怠が兄やふる朝臭の方　蕉
秋いかなかく味ま納食ひろり　葉
白子の左来やの旁の海　山
浪よるとる鯨の宵ふ花植て　藤
陰日を抱(オ)鵜(コ)のかつら逸道　端
笠おてかきゝに立る腹胃　蕉

五重の塔のほとりうす暮　桂揖
鶺鴒の尾を蜘の囲に懸られて　端
風よ身なおくらふの村乳　葉
筆とりて非の廣葉を引捨め　端
田舎あふりの物見そめたる　藤
うちこうりく前意の書様つゞしく　揖
たゝれて冬と酒買はけり　蕉
狼の跡よ鮎たよみ安て　葉
おほん帰京の時あらふ　山
雛鶏のひろしのちる片凄く　藤
猿よの栗の行ありまろくそ　端
蝉鳴てすゝ流柿の秋九定　蕉
草庵うちまゝる尾乃琴　山
のちれふる家物焼て帰るほに　藤

入日の跡九星二ツ三ツ　葉
宮守ら油さけつもそふの奥　蕉
流しの船を泊する西行　揖

留守

牡丹葉ふうくかり出る蜂のあそふ哉
庵ふうりて
夜ころもいまさ気なとくつくれ
菜よ稼せるふ
秋をへて蝶もあるやさく紫
先て冷ひ炭てあくひさ後
年のくれ分きれ
めて炎人の数るもつくる人あのゑ
貞享三年

古畑や薺つミゆく男ども

初懐紙

日の春をさすかに鶴の歩ミ哉　其角
砌に高き去年の桐の實　文鱗
雪村が柳見にけり棹さして　枳風
酒の幌に入あいの月　コ斎
秋の山手束の弓の鳥売らん　芳重
炭竃こねて冬のこしらへ　杉風
里しの麦ほのかなるむら緑　仙化
我のる駒に雨おほひせよ　李下
朝またき三嶋を拝む道なれハ　挙白
念佛に狂ふ僧いつくより　朱絃
ひだるしく連歌の興をさます覧　蚊足

敵よせ来るむら松の声　千里
有明の梨子打烏帽子着たりける　芭蕉
浮世の露を宴にて納め　執筆
惜まれし名の木槿の落るなみ　鱗
独住女きぬたうちけらし　角
山ふかみ乳をのむ猿の声悲し　斎
命を甲斐の筏もて上よ　枳
法の土我剃髪をうつむ人　杉
ちりかしの記をとつる学の戸　重
咲日より車かそふる花の陰　下
橋は小雨をもゆるかけろふ　化
二
残る雪残る案山子の珍しく　絃
古川にれ解て蝶哉とる舟　白
殿守か眠さかってつる鉢はらけ　り

爪たる眉紙かくれとぬく　蕉
けし咲てあさけれ見ゆる若衆や　枳
葉ろみの風ふ矢箆切りに入　斎
かれとて下手ならける狐罠　角
あられ月秋のくもる傘　鱗
石の樋(トヒ)毀るの坊主すきて　白
われ三代の刀うり鍛冶　下
永禄ハ金乏しく松の風　化
近江の田植炭焼ふ恥ら人　弦
とく起て宮指ふせん何とおれ　重
松ふ茶の湯の浦あハれ之　角
二ウ 筑紫ふて人の娘たゝしつれて　下
弥勤の堂ふれもひまぬし　枳
待春の鐘ハ壇たる岩中　蕉

友ふよ燈の拍子犯れ声　化
雨さへそいやしかりる鄙邑り　斎
門ハ奥千を破條の寺　白
狸不足れわらふ武者笑之路　重
あらみて牧の所在撰とは　角
鶏の一声夕日残月にのらためて　鱗
紀の鉛風秋さひ紀家了　下
いかゝ了の木の葛残花咲笹　白
流れなきひしと壁に彩らく　枳
人おもとゑよう物ならうつれ切　揚水
さゝりいさむ金山のほら　弦
三 此国の武仙紙名ある絵に寄せ　角
京ふ汲とる醒井の水　斎
玉川やおのく六ッの承そ　蕉

江湖しよ年寄になり　化
卯の花のこぼれ精まで白ろきか　重
汁かけさせは雀さよふ　水
南むく篤屋の畑の霰きえて　不卜
釈と碁なす宿のつましく　鱗
餞別る播の廣蓋を打合せ　枳
贄に買ろく秋のころは　蕉
麻の音など物いはぬ人はやつれぬ　蕨
小ぶれ男の斬をむ月　卜
窓の雨たもと七里とめぬらん　下
倅弱は内の冬枯川つゝ　水
糸車余つく音はあらしとて　角
梅はさかりの隠しの間　千春
二月の蓬莱人もとさえすや　齋

姉ゆり川牛はおさえた日は乾　重
胸あはぬ鍼の綿と織りて　雀
杉もひたらそは萱の刈はし　枳
蓑の笠など打ちつらみふせてかは鳴　鱗
本奥とてある山陰にしも　下
囚人は守らて休むる鞘有秋　齋
萩さし出寸長つ流れあひ　卜
同し時露と色に名は付て　春
仏ならう篠世は蟬のから　弦
三度ふむよし拾へ流らう芳題　化
あらしはちこの草の露れ乱　下
十傾城ことゝれぬ影ぞふへし　鱗
経よみなりてあれうらく　重
許られ筆打よ加るなかりて　白

椽もちし蕣に日ひかりけり　齋
むら雨に石の灯に水消えぬ　峡水
鮑とる秋の沖も静かなれ　化
停泊成家る月に朝日の前をはなれ　卜
欅たゝりまて橋遠み歟　下
信長の治まる代やすめらん　揚
居士とよばるゝかしこの兜　鱗
紅は牡丹千里の香ながして　春
雲をも谷に出る温泉を尋ね　峡
岩根ふみ童ぬ地名成茂に擢　角
ゆくへや三井の若法師とも　齋
十ウ
連歌急しなれ川に通ひして　化
篁殿さゆれ雪ハ位なし　重
足跡の虚山に向る洪しさよ　揚

千声とあふる観音の御名　角
船いくつ涼をあらしの川傳ひ　枳
尾上にかゝる松の志ら鷺　峡
麻むしろ汎七府にちぢる雲白　卜
連歌くはてる春そひさしき　白

一ツ橋
花咲て七日鶴見る麓かな　芭蕉
懼て蛙のこゝる細擶　清風
足踊木に雲中き氷る花て　挙白
米を升にそゝる咲の戸　曽良
名月を隣は麻なるそまらて　工齋
枝ゑゑし柏の葉成る　其角
墨衣ふるへれむしの売落て　風
内外の下向志しりかりけり　白

まて小豆付手の使いかめしれ　良
一夜のちきり猿か佐ける　蕉
松明よ旅つんとらへ君は殪　角
生て捨子の水に流るゝ　風
親とちも知れぬ敵を世に欲れ　良
ことしの錦かかりし山寺　斎
雪かさ川摺やさらしに家見て　白
虹のたしめい日も白ひれき　角
志つきては温気かさ落す方そなし　蕉
三たれ廉の一つ矢か負し　斎
勢しくと軍に寄する鏃をもち　嵐雪
男からの白粉をぬる　風
俤琴に明の風雅か忘れさる　角
孤さとをうく牡丹散りて　白

耳うとく姉か告るかくしごと　蕉
流れかき夏浴に茶を煎して居る　良
札焼て力はうりに傳へけり　風
我か川鷲を殿の御拳　角
揃もとち犯欲やさしく詠えて　斎
糸の力夜は嘘涌るらん　雪
おとれくおやむ人のひとりね　白
眉ぬく袖の篆篇にふりさき　蕉
唐の書よめぬ所かちやりて　良
ひとり買よ雪の山道　斎
あられさは岩を小捻し破れ網　風
竹やしらくて堵やらぬ浦　蕉
相國の棲結ひ人されと松　角
車か走りて東のやとふひ　白

山さくら尾ふくものゝ先ふくろ

古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉

三日月日記

破風口に日影やよはる夕すゞみ　素堂

煮茶蠅避烟　、

合歓醒馬上　蕉

かさゝなる小田の水落るなり　堂

月代見金氣　、

露繁添玉涎　蕉

張旭がもかきふるる酔の中　、

幢をた右にてくるしゆ　堂

掣帚驅偸鼠　蕉

ふる紀都に残る寺壺尼　蕉

くろうらぬ首かきたる榾の掻　、

我とのむ孫に何を夏こゝ　、

舟鋪風早浦　堂

鐘絶日高川　、

新たり早苗の泥によごれて　蕉

会はすけぬ坂を火の新　、

詫教三社本　、

韻使五車塡　堂

花月丈山閑　、

篠栽拾く花のうらひす　蕉

剪銀鮎一寸　堂

箕面の滝やまと蕪らん　蕉

朝日うけ頭の紅をかくやらし　、

風飱喉早乾　、

よられつる黍の葉ぶりの秋立て　堂

内ハ火をたく庭の夕月　蕉

霧籬顔執與　堂

霰浦目潜烏　荏

ぬくんでも萩に似たる声　堂

こぼれぬ様の珠数と服さし　蕉

山伏山平地　堂

門番門小夫　、

鶴鵜窺水鉢　蕉

宵まくらりて明る空やけ　堂

奥ふかき初瀬の舞台に花を見て　蕉

臨谷伴蛙僊　堂

元禄中終

其袋

夕照　沾荷

情吟の望ながむる西日かれ　芭蕉

湖落うしふ芦の穂ぬれて　露沾

雲のかの鐘を尾られる松立て

隣まもさゆる石あの　露

入日のうれ化粧たる武者ひり　荷

柴の箕まで筆をおやとる　蕉

山寺ハ屋も狐のさ陰えて　露

花落来やと酒造るらし　荷

中の刃日くれ富む鞠の音　蕉

白き胡蝶の垣を飛越す　露

綿張かき採の柱まもちひて　荷

乱れし一整ながむをかへさし　蕉　露

調へかね祀念の汁を音も出ん　荷
何も焼火にされ垂しかり　蕉
捧の月一つの家に傍履て　雲
淡つき深し裏の萩うけ　荷
みゝたくのおのち穏や鳴めむ　蕉
四十雀とて風も身にしめ　嵐雪

鹿島山の月見にまかり
あまた雨しきりに降て葉落る
根本ちかくに宿る人として深省
発せしむと吟じけむしは
らく清浄の心を得るに似たり
句あり
寺に寝てまことかほなる月見哉
暁のそらいさゝか晴けり

月はやし木すゑは雨をもちながら
雨に寝て竹起かへる月見かな　曽良
雲折〳〵人をやすむる月見かな
旅中にて
明ほのや廿七夜も三日の月
深川八貧の中
米買に雪の袋や投頭巾
芭蕉
君火をたけよきもの見せん雪丸け
年の市線香買に出ばやな
月雪とのさばりけらしとしのくれ
貞享此年
嵐雪このおくりける正月小袖
着てみれハ

蓬やしのすりさに似けさ蜑
よくされは荊花さく垣根かれ

老情

牡蠣よりも海苔をは老の賣りもせて
あら紀日も鵆ならぬ雲を落れ
京中やものゝもつゝ泣鳴雲雀

物皆自得

花にあそふ虻なくらひそ友雀
花の雲鐘は上野か浅草か

其角か母五七日

卯の花も母なき宿そすさましき
夏に来る母も又すゝか郭公　仝

嵐雪か讃られて

新しき年を下戸の玄さんおれく　其角

名月や池をめくりて夜もすから

句餞別

旅泊に年をこえてよしのゝ花にこゝろさし侍る人に

時は秋吉野をこめし旅のつと　露沾
雁をともねに風雲の月　芭蕉
山陰に刈田の畝のふきならひて　沾蓬
武者追ちらし早川の水　其角
暮ゝ浮雲に涙る紀撰囊　露荷
おろさぬ窓に萩咲く　沾荷
傘の繪出しくかしら傾けて　芭蕉
参りもうてし神山の氏　露荷
暑き日は汗哉悲しむ旅の声　沾荷
きてし戸の蕪りたる　沾蓬

ゆふべは五天のむかし法もなく　其角
髪ある僧に鐘撞せけり　露荷
恋をひつ鎌倉山の奥涼し　露沾
志ほる袂をよはの風薫　芭蕉
月清くみな立浪へ〻との蝶　沾蓬
客は流りて雑洞しける　其角
花咲て久しく無る草の庵　露荷
額板ひろふ山吹の橋　沾荷
伝法語やたらの陵の春さえて　露沾
聲かけられて多る帰る道　沾徳
楠の葉に我文集を書残り　芭蕉
弟はゆるさ差あれさらつき　露荷
おかけい志のひ安祀る有晴て　沾荷
琴は浮まる秋の暮　沾蓬

馬は下りて野辺やらる村はなれ　沾荷
九穂指さに尾上とるけれ　露沾
風の音なら幽篠鉄のいと遠く　沾蓬
大口着たる庭の雪掃　芭蕉
身もれく膝の孫ろす杏さいふ　露沾
ひとり篆は編むしつれ妻　沾荷
一軸の形見の連歌詠みさし　露荷
名は恥ぬいさ銭の餞は　露沾
面かけて鏡にむかふ男つよ　沾蓬
みそしれの有る秋の挟まれし　沾荷
織織る花のふしれ色のさきら地て　芭蕉
柳一のあれをこつへる春　筆

句数別
江戸さくらしえるちよらん裳袴　濁子

薩埵のこおれにこそうえる月　芭蕉
貝ひろひくり袂ふまて　嵐雪
酔ふこれ人の肩にこうかく　其角
たふの獲れいて松しらや祝公範　蕉
根松苗放揮のたつくしるゑ　子
沈の橋さらし路め肉植ゆつて　角
とれし入帆の見ゆる危浪紙　雪
世の中欺書のりれ方茶の洞　子
跡つかしらの庵編やかしれ　蕉
花会こし命の切のそろしふ　雪
義弑白さく閨の朝風　子
律の恋のふにいしと約貴て　蕉
二夜ともうりのはくし侍　雪
一巻の連歌ねとくむけう

苗代ともむ雨こ降りなり　雪
鷺の巣のいくつかはれ足遠て　蕉
弥宜下りつかる妻の夕月　子

句餞別

きそうねこ蛤をろせ霜夜の達　杉風
一羽さらふ、千ろろ一群　[illegible]
枯る蘆ふのやふし松のみそけて　曽良
田中の道の通りくれけり　依之
月細く己ろ家しつきれ五馬　泥芹
秋風めくりる門のはししよ　水草
露の京餘とて桜の音　風泉
ふよいえせし家のきせ締　夕義
猿まろし女あつしの情行て　苔翠
終味つけ絵おこし明なの　華

句餞別

時雨にし小隠りより上るさ庵　挙白

火燵の桑に俤はやく人　芭蕉

松風にそなたる野はなれとも　溪石

朝霜にふくしき温泉の山の月　ニ齋

鐘一つ三日は響かふ秋の声　其角

鶯の縄目もゆるされしみ　卜千

縫子ともいたはる蛛のゆかけて　嵐雪

餅二つ蕉頭にしては上葉　白

春雨の去程よる月の松宿ん　蕉

鐘ぬし有て飾りとらゝ　宮石

餞別

亭松を君の茶遙や花の空　其角

甲

續虚栗

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初時雨　芭蕉

亦さゞん花を宿々にして　由之

鶺鴒のこゝろほとけのまねに　其角

狼狐分たる山陰の靍　枳風

かけあつく芝生の露の深みさう　文鱗

新らし舞臺月に翁ちや　仙化

中の秋画工(ヱガキ)一流れ帰りつく　魚児

鱸こうしておくる溪(カツ)船　観水

神垣や河東にひく紀波の公女　仝峯

齡(ヨハヒ)と無我しれ君が若松　嵐雪

酒のえにさゞめき達のあらひねて　執筆

卯月の雲を揺るはくら　蕉

鰥ちる袖汲くちゝり早瀬川　之
薩一両よのころ　扨　杭　角
瓦ふらぬ里にさゝがかり小汀　風
有まやあらん酒瀬の篭人　鱗
萬葉とく匂ひも秋ふつゝく　化
れもそぬことが颯ふ傀　儡　峰
途中ふたてる車が藤が巻て　蕉
沖こく船に免されしは　雁　之
花ちるまなの浪く浪を聴ける　雪
わつらぬく　居がつゝ几琴がく　白
須の岸志らしら起世の外に入　水
萱のぬけめが雪が焼　家　化
老がヌの縄まよ荘ははうける　之
茶　流されしあとの冥守　蕉

明着ハ千沼の秋がかぞへつゝ　白
今がれもへ舩よ追ふ蜊　角
記出て子水汲ぐ入海のちり　雪
知らぬ御寺がたのむる桿　水
蕪やふむふむ坂の日にしほれ　峰
小畑さびしき案山子作らん　風
若が戸の馬が酒債にかさられ　蕉
汲ひとる星が妹にそしふる　白
董の志ありて面白きゆふさゝみ　化
幟ふさして民の天王　角
御牧野の笛吹ならふ童(ワラハ)声　峰
倚くるいしく腰にくれ杖　風
りんそうしと又字が昴を呼て　角
揉のまゝ紀蜀がおもへる　雪

隠ヽ家や雪居出れ皮に突かん　水
花代ま出て海苔すらふこ絵　蕉
谷涼き日うら氿花の木間塔　白
声立られたるとられ山鳥　之

三河吉田駅

ごを焚て手拭あぶる寒さ哉

手拭

鳴海本陣業言亭にやどる
亮為井拝亭の君翁へそ
と詠てたゆわりたる紙まで

京まではまだ中空や雪の雲　はせを
千鳥しばらく此海の月　業言
小蛤ふみとたゆらに拾ひちて　知足
酒気さむればうらなしの風　如風
引捨し琵琶の嚢を打拂ひ　安信
僕はおくれて牛いそくなり　自笑
ふるさとに夜哺の鳥鳴にけり　重辰
明日の命の飯かぞへけり　立信
わかり衣も明けぬと泣て　笑
種いくたびしらう東の　蕉
こまかなる香の後も一こよひ　足
かいさぎ哉そへて鄙の振れ　言
髪かけたる態のあふらぬぎもつゝく　蕉
身は旅出て秋の寐ぬかし　風

筋違は分よ為もとをたくむ乃蝶　信
揚枝さしゆふ火の力あつきひ　足
小袖してる花の風をもいとふ　辰
こゝろよく猫の子は捨てけり　信
うき年は誇りて廿もやゝる如　足
父のいくさを記のし一の巻　蕉
松陰よもとこし寄る波の声　笑
麹をぬるく鶏一段ひ　言
出つゝふる恋は朔日を入たきて　信
三度ほしたる物のかゝりけ　笑
山ちら車よ削る木は落ひ　蕉
焼ふらして岩は寺うく　足
瀧津瀬よ行ぬ法の朝嵐　風
梳うく分く薄は草むし　笑

殿やれて肴いむかしの純粋　言
老ゝむ嫗うところもういけ壱　蕉
ふれふりし指のかず嬉しけゐ　辰
條の明り尼よ柔はつくる壱　信
山炎によふ返りぬせる雨は郷　風
辛はたとけかん鳴鳥鳴ヶ　仁宅　足
ちれ盛り文はおつむる窓開て　言
即興うくる飾垣の梅　華

五島撤

安積の浪は花をうつ
筵ちるは霜のうす白　大台成

星崎の霧はうしや鳴衛
松ちくのよる寄の檀ゆ　安信
假山のあられ梅と梅分みて　白笑

はつ子猫れ恋に塵はらひ　知足
鶯のう去ねとまつ身なれはこそ　葉言
居のこれさの雑辺青紀風　如風
一里の雲母なる桝川上に　重辰
待さとめて門さをひこる　言
市に出て売りし仏師見えされ　足
牛に乗りみて辛さ去つて　信
穀臼のを守れか我がひき　風
方ばなしたる螺貝の沼　蕉
たち紙に甲ばうけて秋の風　笑
わづか初そる宇治の桔守　風
庵地る西行谷のあされとく　足
塚木たたく杉の古枝　信
咲花に昼餉の時ば忘れたり　辰

翠

出も霞とすてれはくけし　足
辛螺からの青ぶかる薄氷　風
角ある眉ば化粧する哉　蕉
やつ雪のみぞ冷さく帳の内　言
床られぬ夏に枕あはひ　風
眼ぶくて配示ようさひあくさまん　信
磨子に譲し家のつね　足
式日の日ればさ嫁さてふせく　風
浅草寺の鳴る川ノ口　辰
探手不顚ぶらふるうたたみ　蕉
笠採あふ川蛍火の影　笑
さ川月に外里れ妓の過　足
すゞ杷れかる○く荊袖ひく　蕉
朝露につきへ鴫の嘴かしれ　辰

たらぬからぬめくりにしては　笑
氏人の広園多く花咲けり　言
升與幾もれの春もくまれ　風
田をうへをあらう泥山の名を聞て　信
うれしの外に鐘をかぞふ隠　華

雪の花

熱田の社御修覆ありけれは

磨なをす鏡も清し雪の花　芭蕉
石しく庭のさむきあらしよ　主ニ答る　桐葉
ほしいは松笠落る風やみて　、
我旅帰る山のうけらひ　蕉
秋くれて有ふき窓れ一ッ家　、
枝に雁ひし鹿をひのかへし　葉
乳すゝく子はぬ袂を襟にけ　、

こほろし賛の意を劉力　蕉
ゆるさる鐘をぬきひ於いおうしと　葉
彼あし宮の境ある庵　蕉
古畑にひとり生たる麦まきて　葉
おもふ声や聴るとそらさん　蕉
松明に飯焚ひけり秋の風　葉
夜もよしみる衣ある月　蕉
就中峯れきぬくそ皆ある　葉
温泉はまうえて人もとゞめん　蕉
此塚の女は恋の名にたてれ　葉
たゞ泣桔梗咲る清しき　蕉
親鶯に人すれて陀る経の声　、
ゆうしく下る坂は家のけ　葉
水溜る一里の河原こえすへて　蕉

あらしふきつむれの松陰　葉
そり雲霧なとうけて記あり　蕉
物夜秋なとふるこそ言るれ　葉
鮮そふて經積船を送るかと　蕉
汐越を岩のかくれあらわれ　葉
おちかむ松も似たる遠きて　蕉
縣の鷲のしり目なる　有　葉
あさ山の伏猪我若る声しよ　蕉
道一をち我刈かる　萱　葉
優婆塞か廟つとむる文讀て　蕉
旅人記を抜いめにまとり　、
萸菜にぬれ衆いぬす雨の青　葉
水捕のなる蝸牛そのま記　、
西行の辞よあり露花されて　蕉

麦の秋ま皺うけなり　葉
伊良古崎の南の海の果にて鷹のはしめてこる所といへり
鷹一つ見つけてうれしいらこ崎
杜国か居にて
されいとそいつれもよかり此家の宿
銀か
ひとろの氷ふくるあかりかれ　杜国

千鳥掛
いらこ崎ようかもあらし
鷹のおとれをきゝて
焼飯やいらこの宮にくはれなん　知足
かさむかりし我足の　跡　ことば
松をぬくかま君か子日して　越人
いはゝ鳥帽子の脱るる風　足

瞪るやら馬の歩けるぬあらふ　蕉
思ふかつく汐おほる秋の月　人

千鳥掛

寂照庵へまかりけるまで

へく落葉それほど袖も綻ん　荷兮
旅寐の霜をみするあさつき　芭蕉
けさの月かゝる小萩に鞍置て　知足
御のねとりに野菊折りけり　野水

千鳥掛

寂照庵に旅寐して

冬炭やさらに旅とも思はれず　越人
雪かきておもき枝をうらの松　知足
海郎の子ら鯨をはくる貝吹て　芭蕉
脊戸より立れ繕てれれ　恒人

寄よせんは名月かたくふやえ　足
蕎麦の貢か通を算る　蕉

冬団扇

たかの舎を知足亭に
訪ひて

めつらしや落葉のころの若竹　如風
隠士の薪をみおる冬梅　芭蕉
御車の志ちらくとゆる雪掃て　安信
猶かはまうつれゆかの月　重辰
夫中の声細ききく萩の風　自笑
かしこのとりらに宿の篠道　知足
茗頭巾のころとかぬ建て　業言
妻ゐあつけしひよこ吟え　信
木綿機てぬ間まぬしゐる　風
足らん佛の一言目ちくの流く　足

あらし雲なして故郷の山遠し　笑
投てる鶴の啼かへる見ゆ　蕉
霜覆ひ蘇鉄ハ冬は雪囲ひて　信
絲けし窓の軒ハとまる月　辰
秋やむかしここに居たる客もや　足
ゑうしまる夕暮のつゆ　風
荒れとても衰へてやもる花は猶　信
痩せたる人の春はつかふる　辰
まうりハ子は戸出る朝かすミ　蕉
山のまかひを拾む菜つと　信
我気ハ岸越ゆさつる一つ松　風
うき名をせむるさゝ波の音　笑
えふのことはの橋の涼ふしに　足
琵琶ハおかれ放埒の欲のさま　言

色白は有髪の僧のころも着て　蕉
恩に似たる宮ゐみあけ　辰
抱引御代のけ悲のうねひ山　言
吹かれハ乞ける伊勢の濱升　蕉
貝拾ひ色とる方は晴行く　辰
紅屋ハやし参の庵のやる虫　信
句へとて鉢に植たる菜ありて　蕉
母のいのちをれ女ふる川辺　辰
羊鳴その曉のおさわらし　笑
外山の花は春さ夏はさく　足
日ハ永く雨のふりたに名ふれて　信
一の名跡を譲りくれのく　言

師走十日餘名古屋にて放筆

いらんとす
旅寝してみしやうき世の煤拂
杖突坂といへるところ落馬せり
歩行ならハ杖つき坂を落馬哉
ぬる業や孫の孫まなく年の暮
貞享五年元禄改元
元日寐わすれさるゆへ
二日にもぬかりハせじな花の春
風麦亭二句
春立てまだ九日の野山かな
あこくその心もしらず梅の花
山家にてふしみて炭のうり
ふたくものありとおしえけるに
香に匂へうにほる岡の梅花

かれ芝やまた陽炎の一二寸
阿波の庄新大仏寺旧跡
丈六に陽炎高し石の上
探丸公の御庭にて
さまゝの事おもひ出す桜哉
いせにて
神垣やおもひもかけずねはん像
神垣のうちにハ梅一本もなし
子良が館のうしろに一本あり
御子良子の一もとゆかし梅花
咲みだす桃の中より初さくら
景清も花見の座にハ七兵衛
瓢竹庵
花を宿にはしめ終りや廿日程

総之日

此経紙花に乳のみ子の札
ひらて啼て笑ふ　杜国
来る我とめて童子かな
道の仏くふ人とらつら
万菊丸と名のる首途の
いつれかなき行に
乾坤無住同行二人

よしのにて桜見せうそ檜笠
吉野にて我も見せうそ檜笠　万菊丸

丹波市
草臥て宿かるころやふちの花

初瀬
春の夜や籠り人ゆかし堂の隅

足駄はく僧も見えたり花の雨　万菊丸

臍峠
雲雀より上にやすらふ峠哉

よし野
花盛り山は日ころの朝ほらけ
思ひくれ花のうへなる朝哉

苔清水
春雨の木下につたふ清水哉

西河
ほろほろと山吹ちるか滝の音

かつらき
猶見たし花に明行神の顔

高野
父母のしきりに恋し雉の声

ちる花にふさかりし奥の院　万菊丸

和歌浦

ゆく春に和歌の浦にて追付たり

ひとつぬいでうしろに負ぬ衣がへ

よし野出て布子売たし衣がへ　万菊丸

奈良

灌仏の日に生れあふ鹿の子哉

須磨

須磨の海士の矢先に鳴か郭公

此境はひわたるほどといへるも

蝸牛角ふりわけよ須磨明石

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

湖水

五月雨にかくれぬものやせたの橋

よみうりまうろうとして

去来にやとりしつゝれ

なき人の小袖もいまや土用干

よのうへはまろれしく清る笑れ　去来

長良川賀島氏水楼

鵜飼見に出て

峠おさり月にさゆるもみれずし

おもしろうてやがて悲しき鵜舟哉

鵜のつら小舟とはまきてな之

声あらい艫もろ人々くい舟

何事のみたてにも似す三日月

秋の日

七月廿日竹葉軒会

粟稗にとほしくもあらぬ艸の庵　芭蕉
藪の中より見ゆる青柿　長虹
秋の雨ふり切物に出る茶かけて　荷兮
月かふき潤紙やぬらる山あひ　一井
ひたるしと人の中ハひさるさよ　越人
菜拾りて屋根ふきになり　胡及
木の葉ちる榎のもとへも神無月　巢彈
侘（ツテ）待うぬる嶋の咎もの　蕉
蓮見て坂の鳴声に眠られす　虹
られに狩人や妾かおとろへ　兮
みたけを見とる髪は洗しれ　井
死てるもあまよ玉まるなり　人
石蔵のはうしいれ出る萩が花　及

蓑紙くむとて麻ぬ渡る　彈
火ふりして吸ゐるをのこハ何者そ　蕉
白きたもとの見ゆる奥ゆかし　井
雨乞にまたし花のちる比そ　兮
艸結ふる都の連を待　虹
日和さよみる氣ねのかしまく　兮
木馬出して子も家に居り　及
色黒き下紐つけてかゝるなり　彈
切篭おろうけ凄れ夕くれ　井
さゆうしの香をうくる広敷　人
人一代の忘戦こゑへ秋　蕉
捨し世いふその根も引むし里　虹
きたなくなれと髪も洗ハれ　人
懐に脈見さしてまかせ出る　及

下戸をふくめる雪の秋の亭　兮
早咲の梅を我身にたとへなり（イニ をとこの）　蕉
嫁せぬむすめ眉かいてみる　彈
志のひきよせて紀写に頭美　及
踏とくやさせる扨のとほし　人
明やさ紀秋を満たさを接立て　兮
何秋鳴りほとゝぎすやら　蕉
花よる硯の蓋に拘出ぬ　彈
萱をり出をちらふのかくれ　虹

さらしなの月見んと思へば
送りいてさらしなへおもむく
朝からは酒かりしらぬ路
送られつおくりつはては木曽の秋

更科の月は二人に見られけり　荷兮
桟や命をからむ蔦かづら
霧晴れて桟は目もふさがれず　越人

姨捨山
俤や姨ひとり泣月の友
さらしなや三よさの月見雲もなし

善光寺
月かげや四門四宗もたゞ一つ
十六夜もやゝ更科の郡かな
吹とばす石は浅間の野分哉

曠野
碓川の秋
雁がねもしづかに聞ばからびずや　越人

酒しひならふ此比の月　芭蕉
藤ばかま誰窮屈に愛つらん　、
理をはなれたる秋の夕暮　人
瓢箪の大さ五石ばかりなり　、
風に吹れて帰る市人　蕉
なに事も長安は是名利の地　、
医のおほきこそ目に立にけれ　人
いそがしと師走の空に立出て　蕉
ひとり世話やく寺の跡とり　人
此里に古き玄蕃の名を伝へ　蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　人
きぬぎぬやあまりか細くあてやかに　蕉
風ひきたまふ声のうつくし　人
手もつかず昼の御膳もすべりきぬ　蕉

ものいそくさき舟路なりけり　人
月と花比良の高根を北にして　蕉
雲雀さへづるころの肌ぬぎ　人
破れ戸の釘うち付る春の末　、
見せは淋しき麦の挽割　蕉
家なくて服紗につゝむ十寸鏡　人
物おもひ居る神子のものいひ　蕉
人去ていまだ御坐の匂ひける　人
初瀬に籠る堂の片隅　蕉
ほとゝぎす鼠のあるゝ最中に　ノ
垣穂のさゝげ露はこぼれて　蕉
あやにくに煩ふ妹が夕ながめ　人
あの雲は誰が涙つゝむぞ　蕉
行月のうはの空にて消さるれ　人

きぬさもさく簾に居眠　蕉
秋の田かへらせぬ事出引て　人
さいしなかく文字問にまる　蕉
いかめしく尾鹿の木業居　人
弛きるゝ子の渡てかひる紀　蕉
花のころ談義参りもうらやまし　人
田ふしを浴つて腥き口　蕉
杜磨

苔翠亭

月出は行燈消さん座敷かれ　越人
穐夕かゝる紫墻のひよん　苔翠
此君と名我つゝ竹に露落て　去哉
すゞり行かふのイロハあるひに　反古
南らか声に雨もつほるゝき涙　夕菊
手五

よもすがらの衣山の萩刈　泥芹
おくたく尴のかけれ淋しさ　依々
女房もそれは留主らしき　人
錆とおもうちとる悪れ妄　古
瘧おさへてあかつき我泣　蕉
ゆきさ止ぬ雪の戸明けて怖る　翠
さし継したる曲舞の章　菊
秋風やうち我ぬる夕は衰うる　人
谷の庵のいくらしれ　依
打丁に後まて一羽継かう　菊
沖に船見る数盤の塚　芹
庵人の頭巾に花の散りかゝる　菊
酔ふて牛より落る春風　蕉

鹿島紀行

白菊によき鶏臥れそろしや　杉風
泥かぶりたる稲を干す屋根　越人
月代は海ちかきに旅寝して　芭蕉
笠に玉子をぬきをむるなり　苔翠
ほつかりと折れてそりし紀雲凡作　友五
ちりの海苔ねぶる帚たちねる　夕菊
御内にて念仏申と名をいふれ　依々
笊(ザル)さらて沙の海苔かり　泥杵
左義長の火におとさるゝ達磨　人
瓦ひさしに撫ねる月　風
盃を片手に人をひきとりて　翠
とゝへ更たる名所の貝　五
香のうにあめの個子やならん　依
小袖ちれ出る幸蓋のかさねめ　風

後彼の酒泣は諷誦(フジユ)上る人さらむ　人
哭しは子の孫に勝て　蕉
里遠き花の木陰にさらふ焼　五
たいめく嫁のおこゝ望に入　菊

郷懐紙

左柳亭

はやく咲け九日も近し宿の菊　芭蕉
こゝろ紀た川霜月の露　左柳
新畠去年ぬらつる鋤(イニカ)立て　路通
ちくらとしと山のうさ鳴り　文鳥
酒呑の癖に後をねめたかる　戯人
ふみおらしくも文を捨ては　如行
足の裏あて眠りぬとめくり　荊口
年越間まてふさは祓ゆりぬ　此筋

武人めの妻にんやらぬら露　木因
けつり鰹に精をこすらし　残香
どつくりと灸とる花そのかし出　曾良
書物の内の虫てらひ秋　斜嶺
飽果し旅も此ころ恋しそ　梆
歯ぬけとなまへ貝も吹れを　蕉
肩きく頭巾にふりてかふるく　鳥
おもつれかちる夜の分別　口
一捧にたつる山の花咲て　通
種をえひこむ素の糠味噌　人
萬宝のとうくはりいぬじく　因
村をつれまて大に追加し　嶺
新宮くり御の虎の花もしろき　筋
二代上きの醫ハあさりなり　香

揉弓の工ミするほとむつまし紀　良
烏帽子かぶらぬ髪も落くし　行
冬ともをもの覚へての大雪に　梆
茶のたてやうも不案内なる　鳥
美しく良生れつくあうさよ　人
尼に生へきそ身のきぬし　通
な新に具足とやら誂透して（イニえをかして）　蕉
萩とそたもふ一株の萩（イニ萩）　口
何事も盆秋仕舞ふて仕ぬ　筋
追手も連ふさそふ条宮　良
丸腰に捨て中しまし紀　香
ものに訳しる母の尊とさ　因
花の陰猶余房の草まくらし　行
梅山吹まのころ花さうあ　嶺

十三夜

木曽のやせもまだなほらぬに後の月 芭蕉
行秋や身に引まとふ三布ふとん 岱水
所令僕や酒のやうな酒五升 蕉
いさゝか在て雪えにくらふ霜そ 水
名こもまたまさりそふ代柱 、

木曽の谷

生ぬるひとつふおちるなゐこぼ 芭蕉
ほとけハふほふ寒菜の疏 岱水
代官のかて居にたての月を見て 蕉
居風呂桶の蓋を入きり 、
酢の糟は捨まハ泣れ引とり 水
をふも捨んてくる次相談 、

親の咄えやかる医者ほど苑 蕉
在おしけまる体ぶらしやり 水
香箸れからてとまらる扱此前 蕉
蕨こうて掴るあたる白粥 水
行さき衣は馬ふも添ふる木ず谷 蕉
中稲の荒まは加る風年 水
ところかしまそう作て房漆く 杉風
住みねて歪し網の露けき 水
似らまて村はなろく寺の酒 風
もけておとれふ強き疱瘡 水
初花の浮きなき春ハ色紙て 風
伊賀路のしつれ山の裏ころ 水

継橋集

雪やちる笠の下なる頭巾まで 杉風

刀の柄に氷る手ぬくひ　芭蕉
唐からし赤かうて軒に釣かけて　岱水
秋までよける鍋蓋の蠅　依々
朝しハ布子脱てかる暮の月　曽良
研ぎて捨る腰の下形　蕉
島守にこと葉の札を添しこ　岱
あからむ麦ハ鳥の洞か　野坡
白かしれ指ハ寺の林まて　杉
髪は切ても身を作りけり　岱
焼かとる物入のむしろ押まかり　蕉
貰ひよせしも茶に合ぬ水　良
薮こそ孫よう枕たつ霜柱　杉
出家におれが登り上るゝ　坡
お局のいくならちなる卿の方　良

取り汁の湯のさめて切さく　依
さつ花ハ蓮摘よりいされて　野
簾の鈎黒木にうくひすの鳴　執筆
送人にあつさ杯もこまらし哉れ
元禄二年
元は小田毎の日に忘しけれ
伊達衣
陽炎の我肩にたつ紙子これ　はせを
水やはらかに茶えりけり　曽良
松の底に獨活のあゑ物挑えて　嗒山
身ハうりそめに猿の腰掛　此筋
いさよひも何しか不に勝かり　良

こゝろ我かくれ家の秋　蕉
萩原は露にぬれても面白い　筋
蜘ふり拂ふ代の松明　山
五月やすて小袖の綿も抜お寺　蕉
落たる髪紙と記揃へ侍く　良
忘られて六十人よりもお白し　山
ほそく書ける文の優しき　筋
盃紙そことに火燵とり出て　良
年寄ひくり日待つとむる　蕉
色好く妻も夏はふけりとて晩かる　嵐蘭
相のよふたつ具陰の家　山
旅車昭るひろしは月と花　良
浪はうすその不二を動かは　蘭
客よひて汐干なりける鮎　蕉

大に追ろくあちのむかふる　良
城北のそつ雪晴る義なれて　山
起て火紙吹く鐘つ記か妻　蕉
けうふり迷ひ子なる星月夜　蘭
ふんて勝ち世は兼好え行り　山
山風まとこひし〱孫ろ栗のいろ　良
黒木ふをとへる谷陰の小屋　北鯤
たか婦と身をやはらせん扨安ひ　濵
あらみての百合に洞かけつ　蘭
狼の息そて昭る本河の月　嵐竹
水の岩屋に備へ倣りて　山
夏為けれ振坊の温泉の熱かり　蕉
たひ秣そひたる関のうち物　良
何ゆ蚕人の逃者と分払下ヶて　蘭

膳ハ居れと鯛の涙焼　山
一門の茶せんころものさみしに　鯤
イニつくる家のまちまち
蕨蔵つゞる揺政の筋　竹

未来記

草菴に桃さくらあり門人に
其角嵐雪あり

兩の手に桃とさくらや草の餅　はせを
翁に馴し蝶鳥の兒　嵐雪
野屋敷の火縄もゆるも防哉　其角
山のあなさされ鐘す由あり　蕉
ゑ下に有毛の鶏のはり肥て　雪
風ひやゝかにさましの雲　角
傍輩に相撲の手身なれなれ　蕉
芋掘ころも全れたしふるを　雲
麻衣さへ初穂とりぬ南無大慈　角

豆腐仕ゑの肩こわれ東風　蕉
酒さます扨まかほそ観音　雪
刹やと思ふ庵の紅葉　角
員軍功者に引て帰るあり　蕉
ふらひ言る勇の門方　雪
見返して坂屋へ這入る月の友　角
菴の雛ありと綴る小雄篠　蕉
一通り彼岸の花の咲よりて　雪
日永まめくる涅槃や太秦　角
おたくかは綿子をきせん弱法師　雪
御医者申つけれ加減よろく　蕉
駿城浪人のしと追とし　角
提灯けうる町のいて口　雪
女房より茶屋の亭主恋やそて　蕉

高田の宣花をむかしくて　角
夏衣ぞ紀平の孫もぬきさげし　雪
たしか花風の石菖へまゐる　蕉
牛のおれ牛まゝせうる市草　角
江湖披露の田舎六丈　雪
とりあへと秋ま入月薄羽縫ふ　蕉
いたくとゆうと鴫のもらん　雪
糊たちに四手打蔦のちく衣　角
まんどとのひる男足才　蕉
一家ハ江戸城見るからに高ひ　雪
みたらし汲んで神の門前　蕉
栄へよし木末桜枝し花の陰　角
三人ころみ春れ月うし　雪

菓子盆に芥子人形や桃の花　其角
桃の日や蜷ハ返人にわろいこそ　嵐雪
杉風か壁にうつる
草の戸も住かはる代ぞ雛の家
餞別
松しまや名にとめられぬまゝれ桜　沾徳
松しまや松かけに二人春死人　素堂
千住にて
行春や鳥啼魚の眼は泪
日光山
あらたうと青葉若葉の日の光
剃捨てゝ黒髪山に衣更
郭公うらみの瀧のうらおもて

雪丸け

奈須翠桃亭

秣負ふ人を枝折の夏野哉　芭蕉
青き覆盆子をこほす椎の葉　翠桃
むら雨に市のかりや吹とりて　曾良
町の中ゆく川音の月　蕉
（一二 たかーさうを）鷹の手を放れ居れし夕涼　桃
（く二 萩のさこゑのらくわんハたそ）秋草絵く帷子はたそ　良
（三 小笠ノ私之押分し）ものいへは扇子に顔をかくされて　蕉
ねみたれ髪のつらき乗合　翅輪
尋ぬるに火を焼付る家もなし　良
盗人こはき二十六の里　桃
松の根に笈をならへて年こし　蕉
雪かきわけて連歌始る　桃

六十三

（一二 名所の）廉想てなしに小野の炭俵　輪
砧くさる花たちの家　良
おのか月も見ゆるにも悪気　桃
涙しもそえん胸のつかれよ　蕉
綿備の時めく花の憎かりし　良
朽の羽よふるふ蝶の聲　桃
日傘さし子とる揃ふて毒燈　輪
衣裁をてらかる託世の中　桃里
酒のかれ谷れ折木も佛之　蕉
招人かへる阻の松明　良
落武者の翠の色同州枕　桃
（一二 家ことくと此を注の名）森の遠路に子木の行之宛　輪
（イ二 うきら天波の茎毛）同中の鐘つくほよわりくり　里
一釜の茶ぬこまとり終らぬ　良

乞食ともなりて浮世の旅枕　蝸
洞の地蔵にこもる有明　挑
蔦の葉は猿の泪や染つらん　蕉
イニ蔦之葉に染て流人出羽州
流人柴刈る秋風の音　里
川よりもやうく新田はねむる空　蕉
深ここそ崩ちらし流の白浪　二寸
籏の手は雲かと見へて靡けり　良
奥の風雅はねまとつく　蝸
珍しき郷は花に留置て　秋鵝
弥生くれたる春の海月　里

雲巌寺の奥に佛頂和尚の
山居の跡ある竪横の五尺に
たらぬ草のいほむすぶもく

やし雨なかりせばと書
えたまひしとぞあれば
木啄も庵はやふらす夏木立
ふるのにとりたる白松をれて
唯城横よりひき句よ敷る
清水流るゝの柳とて
田一枚うゑて立さる柳かな
白川関
卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良

懐表紙
須流相良伊左衛門亭
風流のはしめやおくの田植うた　芭蕉
覆盆子折れて我まうけ艸　等躬

水せきて昼寝の石や直らん　曽良
籠に鰍の声生かする　蕉
一葉して月に益なき川柳　窮
雁に屋根ふく村ぞ秋なる　良
賤の女が上総念仏に茶を汲て　蕉
世をたのしやとすゞむ敷物　窮
或時は蝉にも夏のやつれけん　良
樟の小枝に恋を隔てゝ　蕉
うらみては嫁が畑の名もにくし　窮
霧ふる山や白髪ぬれてもうけ　良
酒盛は軍を送る関に来て　蕉
秋をしる身とおもひなし侘る　窮
宿る夜の鐘つき破る鹿の角　良
鳥の所伽の法ふせる月　蕉

いろしのいのりは花に籠りて　窮
かふしは赤松は多く糸桜　良
山鳥の尾にねくる年やむかふ人　蕉
せり摘をする清水冷なれ　窮
薪ひく雪車一をちから有て　良
れのく武士のみそかなる宿　蕉
鬼とらぬ物ゆへ恋の世に合れ　窮
宮にまきしられる匂ひうし　良
手枕に細き肱をさし入て　蕉
何やら事のたらぬ七夕　窮
住かへる宿めぐらされ方絵を見て　良
そゝれあからむ六条が髪　蕉
物患をみ枝うるゝに撰れし　窮
太山はくえの声をこゝろて　良

淋しさや湯もつても宮くぬ旅よ　蕉
殺生石の下はしる水　窮
花をさへ忘るれ狂り我導にて　良
酒の酔ひの醒るよる風　蕉
六十の後てそ人の朧月かれ　窮
蚕飼をる家ハ小袖重ぬる　良

伊達衣

素門可伸ハ栗の木のもとに庵を
むすひて栗といふ字ハ西の木
と書て西方浄土に便ありと行基
菩薩の一生杖にも柱にも此木を用ひ
給ひしとや

かくれ家や目たゝぬ花を軒の栗　はせを
よれよほとゝれとなる夏の艸　栗齋
切り崩す山の井の名ハ有ふれて　等窮
畔伝ひする石に撫橋　曽良

その昔るゝ芭蕉菊に月とそのさえれ
鳥さねたる菊紫に月の暮って　等雲
古菖蒲の秋ハいとくまひしよ
秋来りけりの緑深きれ色を　須竿
あつさる見れ羽の家を乾せて　素蘭
乾出を読る暁の声　蕉
松歯朶に咲よりたる魚の書　齋
酒の送根をいふところなし　窮
鍔入ハ催よみてもさつかしれ　良
されて送まる頓様の冬　雲
貧さを神よろしむる様さよ　竿
力のひつさを石よりさる　蘭
捨して漁猟りかねしる流る　窮
笠の端を引る芦れうる枯　齋
梅を出て初瀬や芳野ハ花の時　蕉
かとめる谷の鞁鼓をりし　良

あるかしに来ぬ声きくる夢　蘭
ゑ白るされぬ黒髪をきれ　窮
峰に雛ぬける年の暮しみ　竿
かくへし琴の膝やれもたき　蕉
うたく藤の蔓さへう花御形式は　齋
朴とかたる市の生酔　窮
行僧に三社の託放いそれて　良
寄合祢ても鳴六つの鐘　蘭
伽よある嶋鴨の餅をとさひ　窮
四五日有ぬえる蚕の屋　齋
ゑ一付てうひあき黒れ也植　雲
簾の音絶て参りせぬ村　良
冠とも涙をそうれ泣濡れ　蕉
（イニ文をこすくれうひまそのふし）
うけうりはうしく文ぬ見なく　窮

恋とれハ世ふうと兄人ふく兄人　蘭
年もせ死せハし急く夜の庄　齋
入りにハ四門よ法の花の山　良
清くめ枝こむる遊生の宿　雲

志のふの里なる文字摺石にて
早苗とる手もとやむかし忍ふ摺
佐藤庄司か旧跡のあとにて
源家の什物拝す
笈も太刀も五月にかされ帋幟
笠島の庄組訪へハ庄おし
くてゆうてん
笠島はいつこさつきのぬかり道
武隈の松みせ申せ遅桜と

挙白か餞別おくりけるにて

桜より松は二木を三月こし

松島

松しまや鶴に身をかれ郭公　曽良

高館

夏草や兵ともか夢のあと

卯花に兼房みゆる白毛かれ　曽良

五月雨のふりのこしてや光堂

尿前関

蚤虱馬の尿する枕もと

尾花沢清風亭

すゝしさを我宿にしてねまるなり

這出よかひやか下の蟇の声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代のすかたかれ　曽良

立石寺

閑さや岩にしみ入蝉の声

新庄風流亭

水の奥氷室たつぬる柳かれ

雪丸け

御たつねの我宿せはしやれ幮　風流

はしめてかをる風の薫もの　芭蕉

菊作り鍬に薄を折そへて　孤松

霧立かくす虹のもとすゑ　曽良

そゞろなる月に二千里隔けり　柳風

馬市暮れて駒むかへせん　筆

猿丸たる父か弓矢をとり伝へ　蕉

筆とらるて剥紙さへむる　流
梅さうん三寸もやとひ紀唐蘂子　良
とたま紙上ヶて通を燕　如柳
三般さらんる葵を被つ見れて　木端
涛の音さく花山の基原　風
雪去らぬ雲は花のれふゝりを　柳
萩端しなる猪の洼やの　蕉
りとし方就焼の小社まて　松
底あらうんと家そろろく　端
茨る花の今は衣を着せると　蕉
かけろふをとむる庭おつれる　良
たのしきと茶を換せる遊娯　流
呆さらぬ悪となる紀さうやき　端
紬香炉ふりは京に立そへて　風

ほさんの京風ふのつ称り　柳
元信のいて小盃はしえんと　蕉
武士さたれいる東西の門　良
花のつらう扉もなく家来　端
ね識よ信くむ葺物の方　流
秋更て杖を小さくさん宿の笠　柳
うくひ添せる美濃の谷渡　蕉
系う敍を年秋たつぬる多宮　風
御殊の縮よきむる明き火　端
奉る供御の汚られ党跡そて　蕉
よされてさむき禄宜の白張　流
ほのしなの盛ると札取れり　風
志つさそれ山も雨の清まし　柳
咲つらぬ花のいさうれ袖とて　端

うらひとゝうら姑蝶廊宿　良
雪丸け

大石田高野平右衛門亭

五月雨をあつめて早し最上川　芭蕉
岸にほたるをつなぐ舟杭　一栄
瓜畑いさよふ空に影まちて　曽良
里をむかふに桑の細道　川水
牛の子に心なぐさむ夕間暮　栄
雨雲重し懐の吟　蕉
佗笠を枕にたてゝ山おろし　水
松むすびおく国の境目　良
永楽の古き寺領を戴て　蕉
夢と合する大鷹の紙　栄
蛭牧の香をおうきとかたちなき　良

爪紅うつる双六の石　水
捲上るすだれに児の這入て　栄
わづらふ人に告る秋風　蕉
水汲る井戸は月にて気ぬかれ　水
きぬさと男とて忍び出さる　良
花の後苔は織らるゝ花筵　栄
経よみいとふむ山陰の塔　水
捨る村は浮世の外の春富て　蕉
刀うちたる甲斐の一乱　良
むかふ垣人も通らぬ寐不之　水
その云たひに削る松の木　栄
星祭る髪は白かれに枯るまで　良
集に遊女の名をしむ月　蕉
鹿笛にもちそれし釜足結　栄

柴賣に出て家路わするゝ　水
合歡咲木陰を昼のやすみば　蕉
たえ／＼に鳴らし若日の祕　良
古への友と語らふわかれ　水
言葉論よる身の家に合　栄
雪よされ師走の市の名残とて　良
煤掃の日を草庵の客　蕉
無人を古き懐紙にかぞへられ　栄
やもめ烏のまよひ入桐　水
平泉は明日は越つゝ咲花　蕉
山田の種をいはふむら雨　良

花摘
六月四日羽黒山本坊におゐて興行
有難や雪をかをらす風の音　芭蕉
圭

住程人のむすぶ夏草　呂丸
川舟の綱に蛍を引立て　曽良
鵜の飛跡に見ゆる三日月　釣雪
澄水に天のうつれる秋の雲　珠妙
きたも南も砧うちけり　梨水
ねぶりても昼のかげりに笠脱て　雪
百里の旅を木曾の牛追　蕉
山つくす心に城の記をかゝん　丸
斧持すくむ神木の森　良
歌よみのあとしたひ行宿なくて　雪
豆うたぬ夜は何となく鬼　丸
古御所を寺になしたる檜皮葺　蕉
糸に立枝にさま／＼の萩　水
月見よと引起されて恥かしき　良

螽あしゝをとる四維の一　蕉
中川をこゑて犬のかしに花折て　丸
的場のすゑに咲る山吹　雪
春松経し七つのとし力石　蕉
汲ていたゞく醒井の水　丸
足袋のこしかけても接裹　円入
敵の門に二夜ねにけり　良
かき消る夢は野中の地蔵にて　丸
妻こもる山犬の声　蕉
うは雪は橡のうれ葉の上さむく　水
温泉の香に思ふ翁は滞りし　丸
鵝の首捻将宿に矢を紛て　雪
そゝかけしほろ衣をとられ法　入
月のかゝる山の風を背にし也　良

鍛冶が火打を稲妻の影　水
森うつろ稲まん付しんた　丸
鳴子おとろく竹藪の家　雪
盗人に住まそふ妹が身を泣て　蕉
いのりもつきぬ関々の鐘　良
盃のさかなに流す花の浪　會覚
幕打上る乙ゝの舞　水

涼しさやほの三か月の羽黒山
かたられぬ湯殿にぬらす袂かな
湯殿山銭ふむ道の泪かな　曾良

初茄集
隺岡重行亭

めつらしや山を出羽の初茄子 芭蕉

蝉に車の音添る井戸 重行

絹機の暮いそかしう梭打て 曽良

閏弥生もすゑの三ヶ月 呂丸

我顔に散かゝりたる梨花 行

銘は胡蝶と付しさかつき 蕉

山の端にきえかへり行帆かけ舩 丸

蘆ふかき里は心もなられ 良

粟稗は日毎の斎に食飽て 蕉

弓のちからを祈る石の戸 行

あか樫は母の記念に植置れ 良

雀にのこる小田の苅そめ 丸

此秋も門の板はし崩れけり 行

赦免にもれて獨見る月 蕉

きぬ〳〵は夜なへも同し寺の鐘 丸

宿の女は妬もものゝけ 良

婿入の花見る馬に打群て 行

もとは廓は畑に焼ける 丸

金銀の春も一歩に改まり 蕉

奈良の都に豆腐初る 行

此雲に先たゝまして釜掛て 良

寐巻なからの化粧うつくし 蕉

遠けさは国の法度を祝禁松 丸

家なしに友なくさせて 良

千日の庵をひとよへ小松原 行

蝸牛の殻と跡はふれ音 丸

身は蟻のあなうと夢や覚つらん 蕉

こけて露けき女郎花の露 行

ゆきかへる月柳の窓に見て　良
温泉かぞへる陸奥の秋風　蕉
初雪のはらりと氷の橋に　丸
山を祀る宮の青ゝ　良
あま衣男にまとふところまで　行
月かよふ夜さ縁のつぎ橋　丸
花の時鳴とやらいふ呼子鳥　蕉
錦まくりし春は山ひこ　良
行つくし山

出羽酒田伊東不玉亭

あつみ山や吹浦かけて夕涼　芭蕉
海松かる磯にたゝむ帆筵　不玉
月出ハ関屋をからん酒もちて　曽良
民の竈のけふる秋風　蕉

しるしして堀にやりたる色柏　玉
あられの玉を振ふるハ蓑毛　良
鳥居能ゝ鶴の宿に冬の来て　蕉
火焼く翁も白髪剃って　玉
海道ハ石もおたまて切せばめ　良
松望れくる武隈の土産　蕉
草枕おかしき恋も仕習ひて　玉
ちぎりての外に祈るかひなき　良
御供して高きに我も思ふらん　蕉
此世の末も見よしと節に入　玉
朝つとめ妻帯寺の鐘の声　良
くゝみも命と誇の乞食　蕉
かゝけたる花し義家も葉菓前て　玉
たほろの鵺の藤不の月　良

しかれいへハ木魂よ乞ハくまその風　蕉
をくくハ瀧ふきゆる山　姫
剣力かけつまはきたる笠脱ひ　良
旅おおさむる塚の蓋を　玉
そゝ川霰ハより嶺を崩らん　蕉
あはれす衣ハ縫くそふく　良
明日志めん雁ハ俵よ生還て　玉
有さへ妻さ陳中の市　蕉
御棄ハおふ菖の奥にうへし入　良
小袖籍と送る戒の師　玉
家貞の母に似たると寐りして　蕉
是にハみえぬ家ハられとも　良
奈良の京都つたへたる古今集　玉
花よ封切る坊ハ酒　蕉

鶯の巣城立さむる羽ざひ　良
蚕種勤きて筆ぞれ取ハ　玉
にしれ木の作りて婚られ急さるん　蕉
こゝろきさ城てのむ宮遠　良
雪丸け

六月十五日寺嶋彦介亭

すゞしさや海よ入たる最上川　芭蕉
月をゆりなす浪の浮海雲　令道
黒鴨の飛行庵の窓明て　不玉
麓ハ雨よならん雲きれ　定連
かばとちれ折敷作りて市を待　曾良
影よ偏こもる宵のあふし火　任曉
不機嫌のこゝろよされ息衣　扇風

象潟や雨に西施かねふの花

汐越や鶴はぎぬれて海すゞし

象潟や料理何くふ神祭　曽良

海士の家や戸板を敷て夕涼　低耳

みさごの巣を見て

波こえぬ契ありてやみさごの巣　曽良

荒海や佐渡に横たふ天の川

直江津にて

文月や六日も常の夜には似ず　芭蕉

露をのせたる桐の一葉　左栁

朝霧に飯焚くけふりたなびきて　曽良

蜑の小舟のはせ上る磯　眠鴎

かくと常むかふに山を見せにけり　此竹

松のあらしに清く供鈷　布嚢

夕ぐれは庭先ちらす石の蓮　右雪

たらひ乞を終ふりけり水　筆

かきひらけぬ莧林傍に寺一つ　栗

さぬしの場所敷も出てたれ　良

教しのうしみれ忍の指つきて　義年

聴まうける秋やうしひらは　蕉

物られま湖を八方めき荒れ　栗

廉引て来る大のふくさよ　雪

原うつゝをとまふらぬ雲衣　鴎

たれさ武人の山本の菴　栗

花の冷其中しられて星をそふ　年

蝶の羽をしむ蝙蝠のうけ　雪

春雨ハ髪剃る児のかきくかも　蕉

香ハいろ〱に人しの文　良
は　右雪
星今宵作ゟ駒牽てとゞめし
ゟ香ゟしき初刈の稲　曾良
瀑水踊ゟいそく布洗きて　芭蕉
此句十七句かし
移植て小枝よ花の名哉志るし　也
雨の降ゟ月の日ハ長宗ゟり　良
糞哉客雪車もれし雪の上　蕉
一むら烏人ふきて　雪
金山や佗て小砂哉拾ゟん　右
耕のむかし哉鳴陰の居　也
うれてゟの百首に奥の名とゝきて　蕉
人いそうし紀年の暮され　良

松かしハ荒てゆらしの音迄　雪
子哉射させる猿の麻　蕉
修行者の禄哉ぬらし硯水　右
住背の月山よ向たし　也
猿皮むく老のかしら哉秋〱　蕉
時雨まて家れ又の紀年越　雪
境演の孤村のゆふり雪ふれ　也
住ゑれむこうれ来活しき　右
かゝふれし枕花の縁よゑひて　曾
笈哉おろせる里の物陰　雪
俳諧哉ゆるつ〇て花の言に入り　蕉
身ホ哉とり偽く梅のひと生　良

越後の新潟の北安のいせん

まうつれは宿して
ひとつ家に遊女も寝たり萩と月
かゝの国に入とき
わせの香や分入右は有磯海
一笑の塚にて
塚もうごけ我泣声は秋の風
女幻庵
芭蕉
猪暑ぶりしまれ斜乱茄子
こしらさやうて秋の日の影　一泉
たよりもなき雉の末まで一ト次て　左仕
遠ろきひし紀村の生垣　ノ松
鍬鍛冶の門欲なうして撫青　竹意
小桶の清水むすふ明くれ　浮子

七より生長せしも蜻蛉えん　雲口
鳥放ちやるれしの栗原　乙州
詠めるへ分に道ある紀して　如柳
ともし消るまは雲に出る月　北枝
肌寒き寒さ走る浴しまる　曽良
とのゝ立木は刈し飾る稲　流志
二ツ屋は盛り分紀中と縁組て　泉
さくら咲ける国の境目　蕉
糸つりて麻苧小袖縫ふ旅衣　枝
あしたふむべき雪の山の香　口
そのみ戸の花まもうつれ雉あそて　浪生
畑うつ川ともきうて露　良
あうしと見ハつれなくも秋の風

卯の年

歡生亭

ぬぎてけり人も松しや乃れ萩
薦うられますしれふく家　亨子
月見とて揃ともまを舩上ケて　曽良
干ぬうくひろ戦待ちぬらく　北枝
松の風昼寐の夢やいさめぬ　二蟾
虫になりへて馬の一むれ　志格
日弐征くる湯本の峯も遠かる　斧卜
下戸よもさせて幸れ酒樽　麁生
紫の古れ鉞もちられたり　李邑
（イ三村雨）（イ三鐙）
足の地底よ枕うつそや　祝三
晩鐘よ鳥の声も乃交り　夕市

欲弐をくむる窄雲の舩　蕉
肌の衣女のうそりとすりける　格
うそぬをやれて我うつねさ　蛆
よりかくる木よりのどれ蛇山戸　枝
雷あうふ塔のふれほり　良
寒まをとめれ非れうらさへ包む　子
胡家さむる林の胡うほ　邑
秋もそうし虫のいの声もふかふれ　市
むりうを立る方れ御　陵卜
みおりかくる花よ茶店へ近れ　生
離うる雪道たつる夕り　三

燕歌仙

馬うりて燕おひけおうれ　北枝

花野みだるゝ山の曲りめ　曽良
月よしと角力に袴踏ぬぎて　芭蕉
鞘ばしりしをやがてとめけり　枝
青渕に獺の飛こむ水の音　良
柴刈こかす峰の笹道　蕉
霧ふかきひだりの山ハ菱の寺　枝
遊女四五人田舎わたらひ　良
落書に恋しき君が名もありて　蕉
髪ハ剃らねど魚喰ぬ也　枝
蓮の糸とるも中し罪深き　良
先祖の貧をつくたる門　蕉
有明のまくりに上座をさくかれ　枝
家中川からぬ揃の弓竹　良
あき風ハものいはぬ子も泪にて　蕉

志ろき袂のつゞく葬礼　枝
花の香ハ古き都の町造り　良
表紙のこせる玄仍の箱　蕉
七宗さやちらし新波の浪迄　枝
根の小鍋を出ル芹や紀　良
まゝならに志らねのほころび拝ひ　蕉
笑しられとのぞく霞西　枝
浅き小袖兼あ夢の古風え　蕉
兆荒人ふる人の桑畠、
晦ふくつ庵に居ても淋しさよ　枝
あはれにけくる三日月の秋、
初茸ハ草れ枕を隠切して　蕉
小いくもちうく保甥の秋風、
疱瘡の業名目敷てかへる　枝

雨もれ墨くり枇杷つゝる之　、
ほそ長き仙女の姿たをやかに　蕉
あらねをしほる氷の白波　、
仲綴か室治のゆかりと打添か　枝
寺は使をたのみる口上　、
猿つきて拾いん花も出ぬなり　蕉
酸狂人とやよひ暮けり　筆

萩の枕

一派りえうゑる萩の枕かな　路通
むしのゆひ音紙蔵縁の下　菊々
紙子もむかし出かけ冷濯て　白之
たうしにたそむ無気の夜かな　残夜
植木屋は樹木に新我かくれけん　芭蕉
食のさてや來車はおほえ良　曾良

肌ぬきて人にみせらる夕涼かな　夕
児そろゝ手跡のたゆしれ　通
たきおのりふりに隠遁破鬘廬　良
ほそ紀移して接菜すり入　木因
蕣は花もさとく鳴きまうり　夜
有え当りし緒の裳末　之
さらりしの貝拾へる布ふるふ　蕉
地獄絵拭なく櫛のこなさ　通
さめしれ虎目に寝て眠らん　困
緒か恒根ふふやむふもかけ　夜
豆腐ひくるさへゆかぬ御の花　之
烏の巣とりて住あらん菴　蕉
和さしきや落り兜もなくて　夕
おもしに光る雪の見　良

岩まくら身に染つむかれしは　夜
けふの空に身を投るまたなる　通
身をすてたのむたよりもなき旅　蕉
揺らるゝたびにおかひさぬる　之
ゆるさいは熊野参りの暁して　夜
茶をつらゝ人を能す　通
田を買ふてわびしくもなお葉ふ　蕉
大呪うつる森の入り口　夕
中よ有秋を紙うしろに結ばり　良
そゝろしきこの秋の炭やれ　夜
谷越に新酒呑とよそるあり　夕
ちや辻堂のうらに棟上る　通
うちもれて疫病送る朝げけ　之
麦もかけて一かれ行し　蕉

夜るを急て近うなるゝもれ行夕
胡蝶とならで杢の新華

多田の神社にて実盛の甲
錦のきれありて

むざんやな甲の下のきりぎりす

山中温泉

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ

桃妖に名をつけて

桃の木の其葉ちらすな秋の風

曽良にわかるゝとて

今日よりや書付消さん笠の露

ゆきゆきてたふれ伏すとも萩の原　曽良

全昌寺

庭掃て出るや寺に散柳

よもすがら秋風きくやうらの山　曽良

小松の本にて

物書て扇ひきさく余波かな

氣比神社

月清し遊行のもてる砂の上

名月や北國日和定なき

種の濱

月いつこ鐘はしつめる海の底

如水別墅

籠居て木のみ草のみ拾はゞや

木因亭

かくれ家や月と菊とに田三反

如行亭

やせながらわりなき菊のつぼみかな

千鳥掛

知足か子の新宅を賀す

よき家や雀よろこぶ背戸の粟　ばせを

藪ようこんかる秋の菜荊萱　知足

なかけ流を烟の編橋きらめて　安信

風呂焼より月のたけほの　蕉

枚垣のあさくれとゞ鶉鴫声　足

また寂下りて紙を打つく　信

いせの遷宮おかんとて

蛤の二見にわかれゆく秋ぞ

そうさのうれ押あひぬ遷宮

長尾跡

初時雨猿も小みの欲ほしけ之

多胡碑集

いさ子ともはしりありかん玉霰　芭蕉

折炭に定まりたりし水仙　良品

羽箒の風やむ旅に軸まかれて　揖風

居をとひもしむ方の捷逕　之園

鳫の声簑のかりそめ衣かな　去芽

さらゝく落る峯のとん栗　半残

雛臥の花ふむ音にすとれて　品

もの喰らちの蝶のうろさよ　蕉

居独ら厩斗原し倚る海塗の妻　園

流れ為るとけよ雨の手拡　風

魚紙志のひしに沐みて　残

公出

鷺もとりてまや別まるゝ　芳

馬の音借宿迄のとかしの小　蕉

有入てらふ不二のつらく見　風

秋うせの籬ふるへいやらせて　品

簾ふよりける藪の山雀　園

為しとれは皐れぬらく花の里　芳

羽織とるへらく妻の糸文　蕉

鍬立て耕を肩とうちやとめ　風

首の几たる頼朝の雀　残

初雪よまり下れる紙出ける　蕉

ちよ事多し奥刕の客　品

芸道し君の卒塔婆に注この水　園

林あられよ鶴の葉の戸　風

寐る時も訓まれ安紀續け音　芳

風雅仕上し酒のこれ肴子　蕉
世の中ハ擬媼界ある旅衣　品
こゝに花見られハ佛切たさ　残
猫隣蛇ハ月放飛りしてくゝ之　風
僧の髭剃る盆の夕暮　園
おこし来しなみめくゝと踏ほて　蕉
兎のうまく畔ヌ網しる　風
生れ来て煙草よのまぬも気楽　品
去し髪ありしに知るよかゝる　芳
左義長のけふもおさまり花き揃　残
あつるく雪ヌ戻とつる　葦園
金屏の松のたひや冬こもり
おしまて

初雪やいつ大佛のはしら立
緑洒堂
浪花津や雨すれふさも冬籠
志いしられみる人数
二
ふくさめて
先いかく梅をんのきとあり
落柿舎にて
此嘯の墓もめくらう跡さ記
第来せ志似てもころせん跡可　去来
何よこれ節季の市にゆく鳥
元禄之年
蔦枕ならて誰人ゆすく風の音
室とめす
暗き屋のわくものゆくの枝芽

晴るてや花にそて行る檜笠　園女

こえの景松ねころて

うとかつれらしほれ花も浦霞

俳諧集

太神宮法楽

何の木の花とも知らし匂かな　はせを

声よ朝日を含むうぐひす　益光

まちかねし葉の檜雲を離れて　又玄

二家の菫御幸待かゝり　雲菴

有明の名紙を消よ行つゝみ　勝延

廉名をふる杖のおのつから　清竜

鈎り揃よ嵐のかゝふきすて　光

門細めなる田の中の寺　蕉

仝十八

山路来て清水やまれある袖の汗　菴

野よ鶯はたのむ哉しけき　玄

女のこ古妃御館の破をされ　蕉

碁よ村つきて洞落しつ　延

いねうてれ酒さへあらは汲出ひ　野人

旅のかり屋よ僧のとりりて　光

あら雲にのほきと鳥を放つ比　里

はしめてほる国の初稲　菴

漏る月が絲ろ機織る家々て　玄

藍のしみつく指くさらん　蕉

神役よ雇(ヤトハ)れ来ぬる渡連社　光

返す小流するきぬの傍　人

烏帽子と池の杜若がおねて　延

水鶏を追よ記し　暁　玄

多葉粉吸ふ舟の綱引はなる　庵
雁の宿あてなれこそやうて　里
おとつれて楽の一声継えて　蕉
狗りの王子の浦八さひなり　光
声立て萩表に張る秋の煙　去
志らずの風に銀杏吹ちる　延
旅うけて旅毎方旅つ人歩行し　人
こころもとなき夜も寝もなし　庵
親ひとり菜よりも水と数づる　光
まりんたる風雅第に代なす　蕉
此坊折ほとときたす宿りこそ　正木
ゆりこむ櫂に身を紫れなり　去
名のぬれし弦に空を引撓め　延
短冊のことわか離の昏　人

一幅半

紙衣のぬるともおらむ雨の花　芭蕉
とくとくやかり汲む水のおそめぬる　乙孝
酒売の船さし掉に接糸て　一有
板屋しのやすらふ　杜国
ゆふ暮の方をさして傘紙て置　應守
馬に西風吹たけてかあり　葛森

○此末芭蕉翁の句ぬきにけり

稲妻のひかりて末は草枕て
雖中のきかき行往ともく　蕉
ゆふへに帰るとかゝる旅人
命ことゝの連歌を懐に、
汐ハ干て妙なる文字須磨の浦

日あしに移る京城なひて　、
乞食集る橘の木の中
聖もまた丸雪かなと侘こえつ　、
貝舟のけしき絶えて侍詩に作り
竹ふかる子の影活けれり　、
湯ざめや柴胡の京は寸暑り
花垣の庭はそのまゝなるの
やへさくの料まつけられ
なるとりひ結びてこめれれ
一里は江れ花ちるの子孫かや

おもひはあれこえつ花さかり　去来
雲雀鳴中の拍子や雉子の声
蛇ともなきけれ花ともしれぬ声
呂丸をいたむ
当帰よりあはれは塚のすみれ草
巳ヶ光
種芋や花のさかりに売ありく　ばせを
火燵ふさけは風こゝろあり　半残
酒好のかしらを結ひ髪て　土芳
ぬれくさる紀草の衣よ　良品
有明の七つ起ある茶院に　残
ひさこの札と附まうしけり　蕉
いろ風に桂のちくちる総て　品

小僧の癖は口ごたへもろ　芳
やもしと矢洲の河原氏の打渡り　蕉
多賀の杉子も山のとゞろ　残
手枕のとゞとも打そて三楊組　芳
人まゝりにく菱名にもし　品
萱州のゝもかいしぬ恋として　残
秋たけ蝉の嘯死小夕り　蕉
月くまて石屋根まくる風の音　品
この日もて青紀藍瓶の露　芳
にさつほの花にれ像ま咲き落て　蕉
猿の鳴来るほのくり見え　残
猫れ眼の六ッ拵稜に四ッ角ク　芳
あとのゑとふひの鐵蘿蔔を切り　品
からくとも病人あれは借さぬく　残

たくさてやいて出る髪結ひ　蕉
とりくれ紺屋の形紙取ちらし　品
冬至の宴まお思ひま次　芳
化粧ともよそへも思ひつる見え　蕉
まさえ猿のにとあくり久る　残
朝夕まはりひの名を照まゝり　芳
いとありれある願く見れ流　品
田鼠の稲倉ひあら浮有流て　残
風ひえそむる年の子れ禁　蕉
露しくれ紙のさ紀を褄もかし　品
死ナとる人の何よ来る一きさ　芳
朱風や吹起されてかへらぬ　蕉
筆紙落せは鳥鳴出す　残
散りしとひと一の花よ指むかひ　芳

米案に邑の大戦うちかゝり　品

ひさこ

花見

芭蕉
珍碩
曲水

木のもとに汁も膾も桜かな　芭蕉

西日のとかによき天気なり　珍碩

旅人の虱かき行春暮て　曲水

はきもならハぬ太刀の鞘　蕉

かちちて假の内裏の司召　碩

籾臼つくる杣かはやわさ　水

鞍置る三歳駒に秋の来て　蕉

名ハさま〳〵に降替る雨　碩

入込に諏訪の涌湯の夕ま暮　水

中にもせいの高き山伏　蕉

いふ事を唯一方へ落しけり　碩

ほそき筋より恋つのりつゝ　水

おもふ身に物喰へとせつかれて　蕉

月見る顔の袖おもき露　碩

秋風の船をこはかる波の音　水

雁ゆくかたや白子若松　蕉

千部よむ花の盛の一身田　碩

巡礼死ぬる道のかけろふ　水

何よりも蝶のうつゝそあはれなる　蕉

文かくほとの力さへなき　碩

羅に日をいとはるゝ御かほはせ　水

熊野みたきと泣給ひけり　蕉

手束弓紀の関守か頑に　碩

酒てはけたるあたまなるらん　水

双六の目をのそくまて暮かゝり　蕉

かりの持佛にむかふ念仏　碩
中〳〵世間に居れハ雲も迷　水
我名ハ里のなふりものく　蕉
ふくみれていしぬ踊の肝を冷　碩
有払しに明ちる　水
花とられたゝすり拾ひし拾て　蕉
たく四方なる草庵の露　碩
一貫の銭むつかしと返しけり　水
医者の薬ハ飲ぬ分別　蕉
ちれ咲ハ芳野あたりの鐵色り　水
枕にさらす光明山中　碩

蛍見

木るゝや和れ酔ふて光来る

露の粒や子も留出る蛍かな　凡兆

幻住庵にて

先たのむ椎の木もあり夏木立　曲翠

ほとゝぎす背中見てやるふすく孙

蛍とふ堂の上も苔の露　乙州

夕ぐれも胡蝶もつれる風の花

信濃へゆく人に

撫の中へりて来る瀬田の霰く

くつきめの心ゆつきし夏の山　野水

海山に五月雨そふや一くらき　凡兆

新道苑岩梨をる猿の足　千那

細径のやもめ示やこゝ夏の山　洒堂

郭公鳴や湖水のさくにり　大学

さゝしきやとも小手を推かね　如行

紙帳をおくりて

おもふ事紙帳にかけとおくりけり　野径

麦の粉をおくりて

一袋これや鳥羽田のこしむぎ　之道

無常迅速

やがて死ぬけしきはみえず蝉の声　芭蕉

俳諧集

大津奇香亭

ひるかほのさしかけ眠る座頭かな　奇香

せめて涼しき茗荷の青葉　尚白

うり方の銭米系にならひて　自笑

ひよいとくの名ひくなり　通雪

松の木枝秋風さそはれしに

孫娘やよんで琴の糸よらう　松洞

うかれたる母にふれて日の積る　香

まへ数よ瓶のまはる夜くさ　蕉

ふる縁にたての文鎮搔なり　笑

粉の業とる童かし梢し　雪

すこし参ぬせんより出て食う　冝香

浮世の手れ情あらく寺　白

おりし咲しとこる方二ツ　同

杖を枕に蘆笠の露　江山

稲妻に晒して社拝まれて　蕉

横しなれ子の汗を流るし　笑

花咲て老恥かしき風の海きや　白

雨に肥たる峯のさくらひ　香

麦飯に鶯の○いく友ありん　雪

されたる宮ゐ鉦の音すゞし　山
その一本の迯まつる松の枝　香
出すとさゝ人来のむしくる雨　官江
たんのうふて悲しき雁四代墓　一龍
追はれて麻の子を捨てもり　蕉
中の秋躍踊る昇紙代かり　雪
三線ちつく荻を踏折る　香
うき人を蚤にて儀る方宮か　白
大将寄つて招しへたかれ女　香
一条や二条はらゝ袖かゝり　洞
去の子出てえ比叡の山風　白
こゝろしと雲に呼はれて名鳴　江
歯朶紙に斉つて帰る野道　雪
醜ぬ時ハ伯父の恩とつゑ忘つゝ　香

姑の妹ハ子紙産に来る　龍
撥くむ妻戸に花の香を捷て　蕉
まれ夏うろたへの初志　白

俳諧集

しら髪ぬく枕の下やきりきりす　芭蕉
入日をさくる西窓の月　之道
あま鴨の鋼うちよする秋来て　珎碩
荊さへたかかつくされ紫　蕉
は風に牛の背のかりしと　道
麦のふうし咲たくく名ま宛　碩
稲ゑて一むまうる縄ふる　蕉
順礼そる慈鉢の杖　道
とし職の帯をしく脈をみて　碩
久しき銀の出る御風しき　蕉

山こ車の持の町ら動嵐　道
かこく、谷より踊蝸走りけり　碩
月影よ冥の苦気紙追りけて　蕉
細もさわつても端とつりにて　道
その人さも布子は霊祀去風に　碩
十二衛載
すまきも殊生の乳賃わかりより　道
時しく小花も行きの奴於留　道
置子葉かりして雲雀うとやく　碩

合歓の木の葉うしもとく宿風け
草の戸を忘れや穂蓼に篭る
狗の木よ鶉鳴なる墟のうち
　　蓑紙やらして
ねりしみう松さらもえよ露有友　土芳

紫田
露の秋雲に露て捨ねる家
添雪は庇い小海老につりのゝ秋
附るや円のかつ様のをらむ経
木枯や頬られらむ人の為
　　智月亭
おれの花の名れしや志賀の雪
初雪の香とらりやさゆる舞　智月
　　幻住庵のうすはして
鶉旅のなところなしつみを鶉　其角
此木戸や鎖のさされて冬の月
　　猿蓑
さう引ねも刷ひつらうひぬ初時雨　去来

一吹風の木の葉しづまる　芭蕉
股引の朝からぬるゝ川こえて　凡兆
たぬきをおどす篠張の弓　史邦
まいら戸に蔦這かゝる宵の月　蕉
人にもくれず名物の梨　来
かきなぐる墨絵おかしく秋暮て　邦
はきごゝろよきめりやすの足袋　兆
何事も無言の内はしづかなり　来
里見え初て午の貝吹　蕉
ほつれたる去年のねござのしたゝるく　兆
芙蓉の花のはらはらとちる　邦
吸物は先出来されしすいぜんじ　蕉
三里あまりの道かゝえける　来
この春も盧同が男居なりにて　邦

さし木つきたる月の朧夜　兆
苔ながら花に並ぶる手水鉢　蕉
ひとり直りし今朝の腹だち　来
いちどきに二日の物も喰て置　兆
雪げにさむき島の北風　邦
火ともしに暮れば登る峯の寺　来
ほとゝぎす皆鳴仕舞たり　蕉
痩骨のまだ起直る力なき　邦
隣をかりて車引こむ　兆
うき人を枳殻垣よりくゞらせん　蕉
いまや別の刀さし出す　来
せはしげに櫛でかしらをかきちらし　兆
おもひ切たる死ぐるひ見よ　邦
青天に有明月の朝ぼらけ　来

湖水の秋の比良のはつ霜　蕉
柴の戸や蕎麦ぬすまれて歌をよむ　邦
布子着習ふ風の夕暮　兆
押合て寝ては又立つかりまくら　蕉
たゝらの雲のまだ赤き空　来
一構鞦つくる窓のはな　兆
枇杷の古葉に木の芽萌立　邦

俳諧集　園風

あさつきや雪をとれぬく藪の内
冬より紙張る指のさむさ哉　梅額
暦よむ人ふた里も安く居て　半残
かゝり牡丹の名は紙ひろめけり　土芳
献じし小笠をもてこの上をかけ　良品
扇の角紙にはしたを奉りし　風麦

春はあゝ蔚縞の鞘はさけ筆て　芭蕉
ちり非鳴るお監ら養　木白
馬の鞍ふ中へてまおる採花　額
おこ野と出は泥逆縄の紙　配刀
伊勢の海まられまふ復と打そ紀　麦
敵の首紙れくる　た々　風
村人ハ霜の道まて取りて　芳
鋳江門徒紙ゐるとおりをる　品
造り出は冬ら年れ酒も其日に　残
有も名禊の宿ら室紀はし　刀
株うり溝は穂葛見生茂り　風
ふく出ちちは庭れ芭蕉とふ　麦
そまし楽れ衣裳を拾挿て　蕉
出しかけたる饅頭の汁　芳

この花は瀧どのほろも今路ゝ　白
肩におもぬる供のさうらひ　額
残る雪男にらんきん里かへり　風
放て犬の頭を進まする　麦
葬礼に志ほる、馬の衰るり　品
女嘆ける外の戸のうち　芳
後朝の玄猪の餅を配るとそ　蕉
脊中ハさむく眠うちける　白
志られる旅の中に気なりれ焚よ　額
手紙ひらくる猿沢の奥　刀
殺よめんと暫し烏帽子傾けて　白
ふところしや旅の侘黛　残
七夕にうれをかしたる涼ふるさ　風
家売りて世ハあし紀ふきさ方　蕉
卆

柿の木の枝もたわわに実をおきて　遠
乱てさらし名や江家るる　芳
旅引者の踏まよひたる降つさひ　額
小斗の星影清くむせうるさ　白
鷹の爪おろりさむく啼ぬらん　残
松ハ一本山の梢しし　風
乞食して花は寒たる薦すゑ　蕉
雉子しぬると怖いる子紀　芳
春雨ハよろしく酔のさめしくて　刀
おもハぬ方の款冬咲清む　麦
試ころハ火をも焚ならぬ独さこ　品
家主の末て琵琶の名を向っ　白
引かつくおやめ時階子ねむたけに　芳
園の葉ふいてともえしゆう暮　風

月のよるつらし聲をうつくし　蕉
隠うちし邑のいさかひ　刀
壬生山家集　百歳
みちよりや小斗の早の前
笛の音とほる暁の橋　式之
一はらひ雀の来て森る松だで　芭蕉
まいりし荊し田面遥けし　夢牛
盃の名残あるため人寄けれ　村鞁
脱押ぱら紀雲の衣まで　槐市
宮殿の簾の中の大さらひ　梅額
京らんの小孫直ち宿に下りし　蕉
挑灯をとほせといひし蔭戸声　牛
紙衣羽織をとこし白いせ　之
消しく残えより人まゐとて　百

ふるき名染の露をしくなり　額
有明の伺ちかく膨ゑ餅をうへせ　市
米はくらさる青山の秋　村
さなりひの緒を砕まかせなる　蕉
瓶呂ま添へく出を白糸　之
杖つきての隠れの坊ゝまれの物　額
空あくてかまはとめ息うり　百
去れまて猿に小唄残ねせなう　村
寮や簾の屏風ま畳く鹿獅子　額
面らけま赤かさしたる唐団扇　蕉
秋風のさうり普風ま去らるく　牛
ちらしもおくまれ毛のるまし　之
むかしころ雀叔るくつしゆく　村
紫賣の市に限りま酒買って　市

明日の鐘撞の肩も睡たり　之
いな妻にみな濁ふふ渡しする　村
露ふけさいや茶ねの紋　百
子とも等が待つる家移あらそひて　蕉
ちさ沈むまよりつん古る揀札　之
狩衣を下す家の烏帽子紙傾し　額
幕紙志ほれは皆けしとる　蕉
雛のうたふもそれの盃なれや　之
畑うり渡すもある陽炎　市
私ならの斜陽やたらんと弓提て　百
縺よ淀者るすされ一ふさ　村
物の親

上卯吉まて

牛日ハ非戒友にやとしとれ　芭蕉

雪よ土民の供物納むる　示石
水荒る芦のぬけりし雁鳴し　凡兆
関よ秋ろろ表揖の声　去来
おうしをとふるふ方の旅人　景桃
秋よ実れる虫食の杖　乙州
實入よき家紋の早稲の香をきて　史邦
里近くなる馬の足蹟　玄哉
押ろりて大ふられそう笑う絲　石
奉加よ出る僧の首途　蕉
赤く川や家座の土さふしあき　来
衣もたゝ荊咲くつ　兆
洗濯よやとれれ歩行絲う業　州
猫のいゝみの声も恨めし　桃
上いえ下ハ志もとて為思ひ　蕉

皆白張のふごとは帝となり　石
高麗人に名示をたてる方と記　好春
芸の海辺に鯛の浜焼　邦
昼下り麻たゝぬ宿は鳴子　兆
雨ほろしと南吹くなり　来
米節隣つゝくれおさかり　桃
日残りてゝても知るは戻るる　蕉
あまり後経の秋から九十夜　哉
札さへとらして蚤迄しなり　来
閑なる宮に絵馬の落ちたし　邦
葉麻の里のおて寝し起　桃
蒼原はからろつ紀の八鳥鳴　石
野中に捨る鉢の有たけ　春
力細く小雨にぬるゝ石地蔵　邦
百

世八ぬり汐干焼て冷人　兆
萩を子に藤が妻小家違て　蕉
あやの麻売に小屋の日の影　石
泣しも小さ草鞋ハ求めかね　来
たそこの形の風に動ける　哉
まろ白小簑表をくるむ花盛り　桃
霞にあへる鶯の羽きひ　邦

乾鮭も空やのやせも寒の内

京を出て乙州が新宅に
春を待て

人に家を買ハせて我ハとし忘

乙州が東行をおくりて

つきとまへえまり振やふしの雪　智月

仍（ヨツテ／スナハチ／ナホ／ミギリ）蒜（ヒル）

越後 中条 [illegible]屋

中条 [illegible]

[illegible]軒文庫